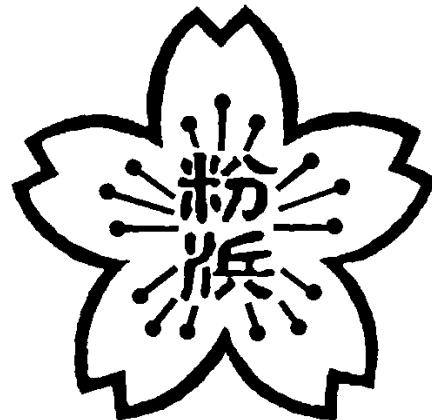


令和7(2025)年度 研究のまとめ

研究主題

子ども主体で創る「探究的な学び」

(生活・総合的な学習の時間)



大阪市立粉浜小学校

はじめに

本校では、昨年度に引き続き、生活科・総合的な学習の時間を研究教科とし、「子ども主体で創る『探究的な学び』」を研究主題にして、2年間研究を進めてまいりました。

現行の学習指導要領では、探究的な学習について、児童が①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見つけ②そこにある具体的な問題について情報を収集し③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み④明らかになった考え方や意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見つけ、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく、と明記されています。

今年度、本校では特に「子どもが主体」であることに重点をおき研究を進めました。子どもたちが「もっと知りたい」「どうしてかな」と感じる姿、身近なことの中にも知的好奇心をもち、教科等の枠を超えてそれを探究していく姿を求めてきました。その姿は、学習指導要領が基本方針としている「子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す」ところに通じていると考えます。

研究を進める中で、意欲的に話し合いや調べ活動を進めている子どもたちの姿がみられ、「人との出会い」や「実際に体験すること」は、子どもたちの成長にとても大切なことなのだと実感いたしました。

2年にわたり、本校の研究に携わっていただきました大阪市総合教育センタースクール・アドバイザーの松井奈津子先生、そして、子どもたちに関わり、お話ししてくださいった地域の皆様、出前授業をしてくださった多くの方々に心から感謝申しあげます。

今年度の粉浜小学校の研究内容をご高覧いただき、多くの皆さまのご批正、ご指導を賜り、また、次年度の本校の研究に生かしてまいりたいと存じます。どうぞよろしくお願い申しあげます。

令和8年1月

大阪市立粉浜小学校
校長 信貴 通子

目次

I. 研究の概要

1. 本年度の研究主題	1
2. 研究主題設定の理由	1
3. 研究の視点・内容	2

II. 研究の組織と経過

1. 研究の組織	6
2. 研究の方法	6
3. 研究の経過	7

III. 各学年の実践

・ 1年生の取り組み「はなをさかせよう」	9
・ 2年生の取り組み「ぐんぐんそだて わたしの野さい」	19
・ 3年生の取り組み「『思いやり』のあるまちっていいな」	28
・ 4年生の取り組み「地震・津波から粉浜を守り隊！」	37
・ 5年生の取り組み「お米博士になろう！」	46
・ 6年生の取り組み「『なりたい自分』を見つけよう」	54

IV. 研究のまとめと今後の課題

1. 研究の成果	62
2. 今後の課題	63

I. 研究の概要

1. 本年度の研究主題

子ども主体で創る「探究的な学び」

2. 研究主題設定の理由

本校では、昨年度から生活科・総合的な学習の時間についての研究を進めてきた。「探究ペタ」や掲示物、写真や思考ツールなどを活用することで、子どもと学びの過程を共有して進めることができた。また、指導者側で前もって、探究ペタや子どもの予想される反応を想定しておくことで、さまざまな「本物」の人や思いに触れる活動を計画的に行うことができた。1年間の取り組みを通して、子どもたちは多くの人と関わり、たくさんの「思い」を知ることで、これまで以上に今後の人生・生活に生きる学びを重ねることができた。

その一方、子どもたちが主体的に学習を進めていくという面では、まだまだ課題があると考えられる。令和6年度に行われた大阪市小学校学力経年調査における児童質問紙では、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか」の設問に対して、肯定的な回答をした子どもの割合が大阪市平均の数値を下回っている学年が多くかった。

「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。」という項目に肯定的な回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）をした子どもの割合

学年	3年	4年	5年	6年
本校の結果	72.3%	63.3%	82.9%	55.7%
大阪市平均	78.9%	75.1%	71.4%	71.2%

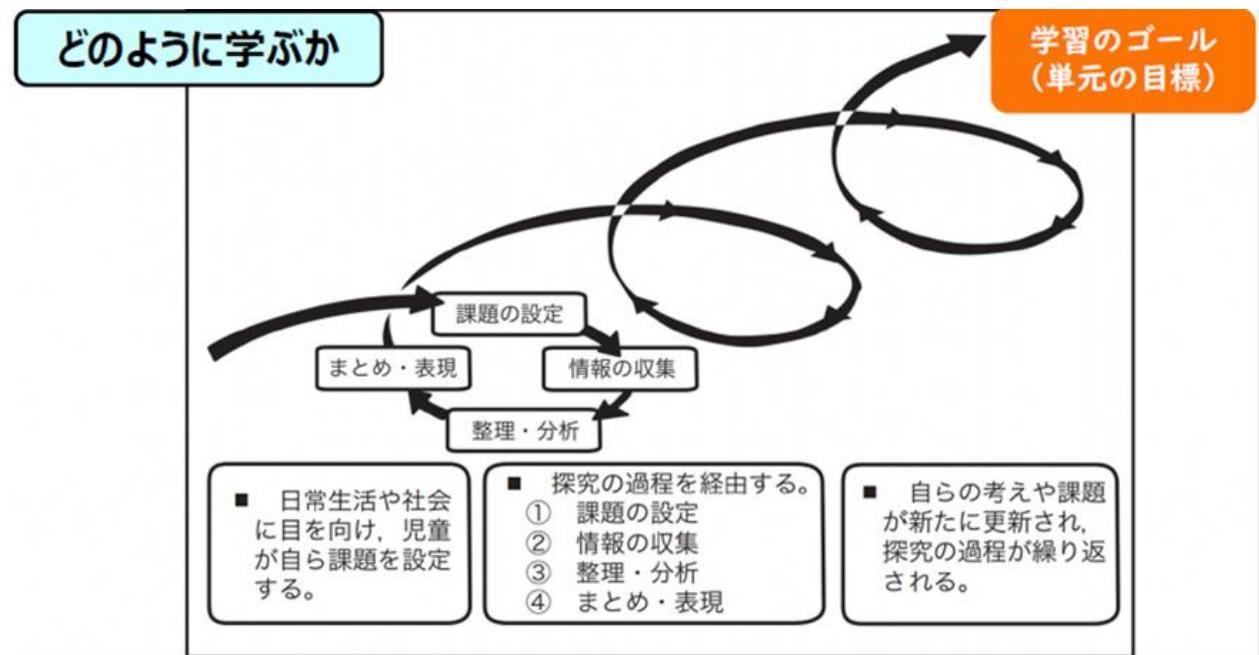
課題を解決していくことに興味・関心はあるが、自分で考え、自分から取り組むという面では、自信をもつことができない子どもが多いと考えられる。そういった子どもの実態を踏まえ、自分で調べて解決する学習活動をさらに追究しようとえた結果、今年度も引き続き研究教科を「生活科」「総合的な学習の時間」に設定することにした。昨年度の取り組みに加え、さらに子どもが主体となって学びを進めていくことができるよう、普段の各教科の学習から、思考ツールや具体的な活動方法、付箋の使い方、ICTの活用方法などを指導・助言していく。そうすることで、活動・表現の幅が広がると考えられる。また、子どもが自然な流れで、「知りたい」「調べてみたい」と思えるような問題場面を作ることで、自ずとその問題解決に向けて意欲をもって取り組むことができると考えられる。

生活・総合的な学習の時間には、身近な人々や社会、文化、自然などに興味・関心をもち、探究的な学習を行っていく。粉浜小学校の地域には、住吉大社のお膝元である粉浜商店街、住吉公園などがあり、町は非常に温かい雰囲気である。自分が住む地域とのつながりを大切にし、粉浜地域の特色や歴史、文化について自ら問い合わせを見いだし、課題を立て、様々な方法を使って集めた情報を整理・分析してまとめたり表現したりする活動を行っていく。また、課題解決のため、他教科で学んだ知識や調べ学習の技能を使って教科横断的に学びを進めていくことも考えられる。子どもが主体的に学びを深め、仲間と協働的に探究していくことに重点を当てて、本研究主題を設定した。

3. 研究の視点・内容

子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

子どもが主体的に学ぶためには、学習展開が子どもにとって自然な流れである必要がある。そのためには、今年度も、探究的な学習のプロセス全体と1時間1時間の授業をつなぐ「探究ペタ」（中京大学 教養教育研究院 泰山 裕教授）という手立てを取り入れ、実践を進めていく。

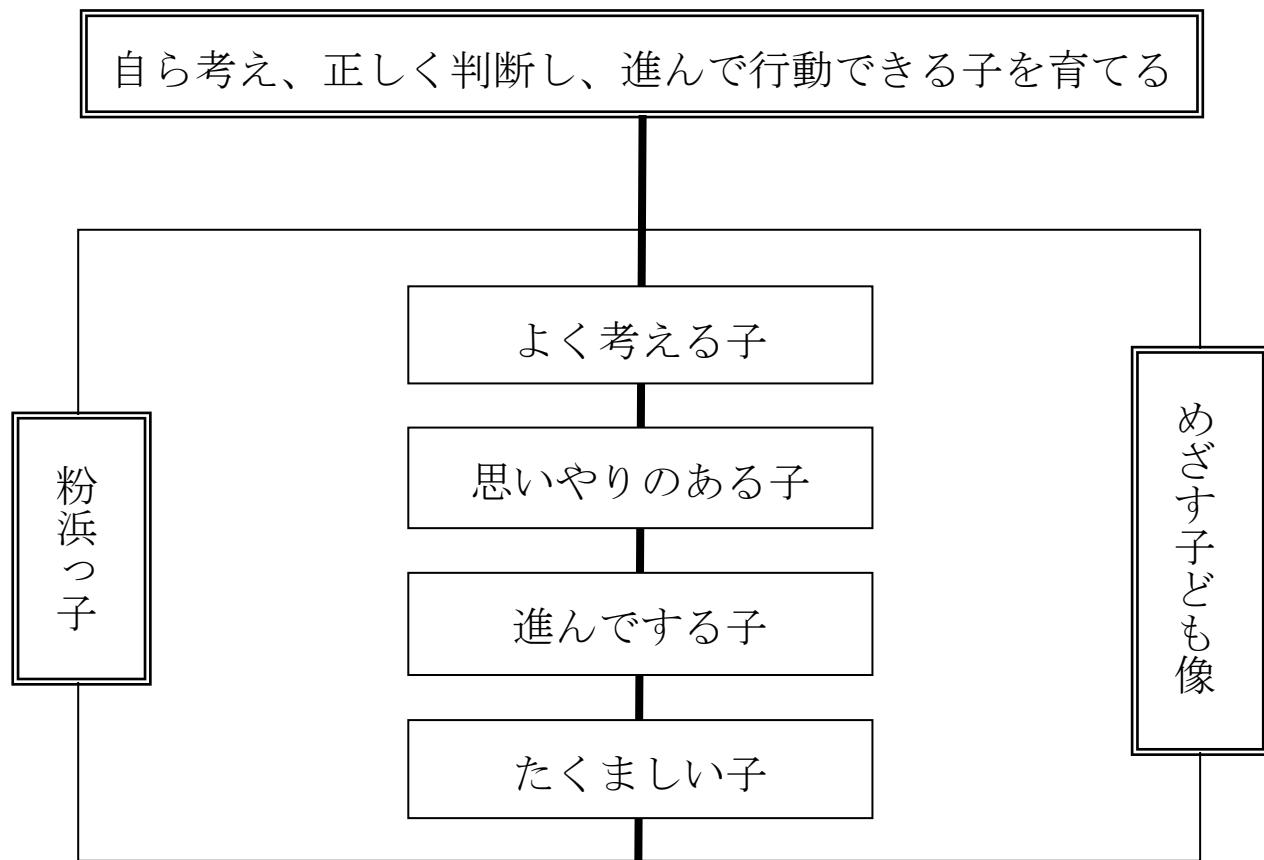


探究ペタの活用方法（中京大学 教養教育研究院 泰山 裕教授）

- (1) 学習計画をもとに、「課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現」という探究の一連の流れを、それぞれ色分けした付箋に書き出し、ホワイトボードなどに貼る。
- (2) 計画した1次から最後の次まで、同様に作成して、学習計画全体を俯瞰してみられるようにする。
- (3) 付箋の貼られたボードに、活動の状況を書き入れたり、子どもの思いや願い、反応、考えなどを書き込んだりしていく。
- (4) これらをもとに、常に活動状況を見直し、絶えず変更や修正を行い、今後の展開を検討する。
活動のチェックを絶えず行い、柔軟に変更していくため、活動の全体像を探究ペタにより「見える化」しておく。今年度は、この探究ペタを生かして、これまでよりもさらに子ども自らが学びを進めているという意識をもてるようとする。探究活動を通して、子どもたちが指導者とともに自らの学びを更新していくことで、探究的な学びを自ら進めていくための力が育成できると考えられる。

本校のめざす子ども像と全体構想

学校教育目標



学校経営の重点

豊かな心をもった子を育てる

研究主題

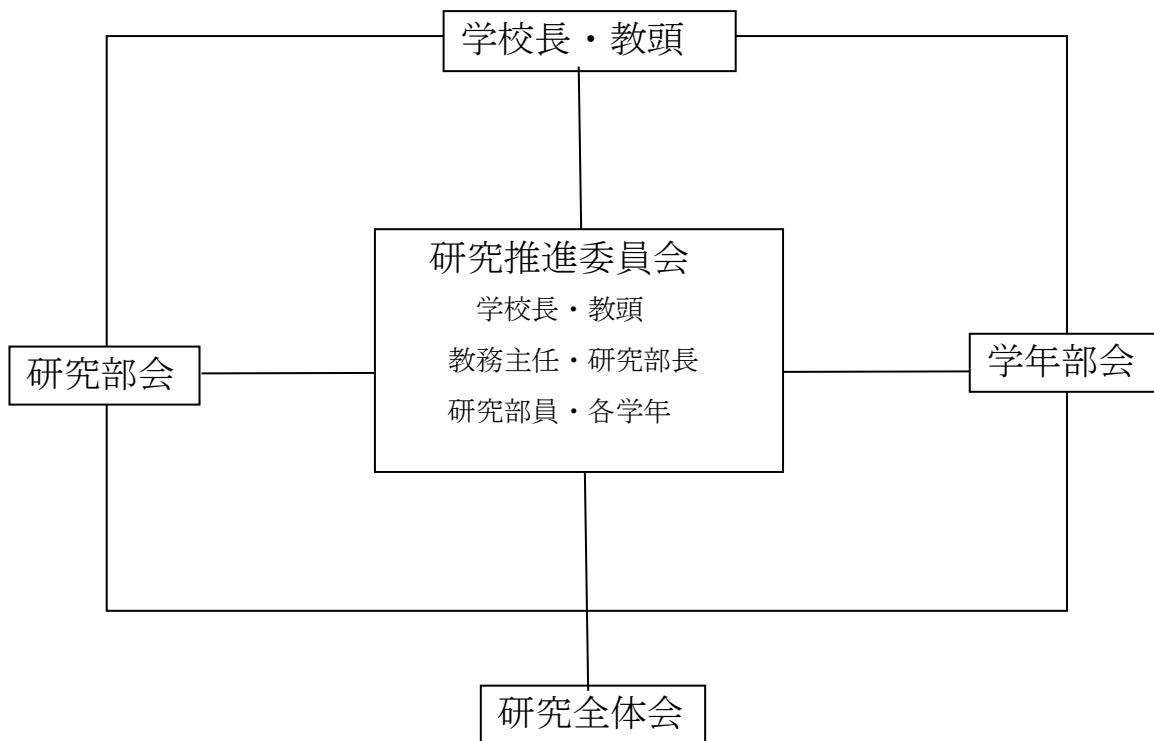
子ども主体で創る「探究的な学び」

(参考資料) 小学校学習指導要領（平成29年告示）教科目標

	教科目標
生活科	<p>具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴のよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようとする。</p> <p>(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。</p>
総合的な学習の時間	<p>探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようとする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問い合わせを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようとする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>

II. 研究の組織と経過

1. 研究の組織



- **研究部会**

研究部員で構成し、研究計画の企画・立案・研究活動の運営にあたる。

- **研究推進委員会**

学校長・教頭・教務主任・研究部員・各学年で構成し、研究の具体的方法、指導案の検討、研究収録の編集・作成など、研究の推進にあたる。

- **学年部会**

各学年の担任で構成し、教材研究や指導案の作成にあたる。

- **研究全体会**

研究推進についての共通理解を図るとともに、授業研究を通して研究を深める。

2. 研究の方法

- 研究の視点に沿った授業実践を行い、研究に取り組む。
- 研究部会、研究推進委員会、研究全体会、授業研究会を設け、低学年部会・学年部会・高学年部会の3つのグループに分かれ、研究を進めていく。

3. 研究の経過

月	研修内容
4	研修計画立案、「運営に関する計画」作成 保健安全指導計画作成 研究推進委員会 食物アレルギー研修会
5	全国学力・学習状況調査についての研修会 人権教育全体会（児童理解）指導案検討会（2年）
6	指導案検討会（1年、5年）研究授業・討議会（2年） 外国語研修会 特別支援教育全体会
7	研究授業・討議会（1年、5年）
8	指導案検討会（6年）
9	指導案検討会（3年）研究授業・討議会（6年） シナプソロジー研修 ICT研修会
10	「運営に関する計画」中間評価 指導案検討会（4年） 研究授業・討議会（3年）
11	研究授業・討議会（4年）
12	研究推進委員会 国語科研修会
1	住之江区教員研究発表会（2年、3年、6年）
2	校内人権教育実践交流会 人権教育研修会（児童理解）
3	「運営に関する計画」最終評価 特別支援教育全体会、研究のまとめと次年度の計画

※今年度の授業研究会の仕組み

大授業として、低・中・高学年から、それぞれ1本実践する。

大授業を行わないペア学年は、授業研究を1本(中授業)実践する。

大授業・中授業を行わない学級は、プレ授業を実践する。

大授業は、教職員全員参観。

中授業・プレ授業は、低・中・高学年同士、研究部、見に来られる人で参観。

III. 各学年の実践

第1学年 生活科学習指導案

指導者 大阪市立粉浜小学校 森田 真尋

1. 日 時 令和7年7月4日（金） 第5校時（13:50～14:35）

2. 学年・組 第1学年2組 在籍27名 於：1年2組教室

3. 単元名 「はなをさせよう」 内容（7）「動植物の飼育・栽培」

4. 単元目標

植物を継続的に栽培する活動を通して、植物の育つ場所や成長の様子に関心をもって働きかけながら、植物は生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、植物に親しみをもって大切にしようとすることができる。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に気付いている。 2 育てている植物に合った世話の仕方があることに気付いている。 3 生き物は生命をもっていることや成長していることに気付いている。 4 生き物への親しみが増し、上手に世話ができるようになったことに気付いている。 5 植物の栽培において、その特徴に合わせた適切な仕方で世話をしている。	1 植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に着目して、観察したり世話をしたりしている。 2 植物の立場に立って関わり方を見直しながら、世話をしている。 3 育ててきた植物のことを心に寄せて世話してきたことなどを振り返り、表現している。	1 よりよい成長を願って、繰り返し関わろうとしている。 2 植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に応じて、世話をしようとしている。 3 生き物に親しみや愛着をもったり、自分の関わりが増したことに自信をもったりしたことの実感し、生命あるものとして関わろうとしている。

6. 指導にあたって

(1) 子どもの実態

本学級の子どもたちは、動植物に積極的に関わり、自然に親しむ子どもが多い。「幼稚園や保育所で、何か育てたことはありますか」と尋ねると、「フウセンカズラ」「ヒマワリ」「チューリップ」「アサガオ」を栽培したという声や、「カタツムリ」を飼育したことがあると、活気あふれた様子で回答した。また、ある子どもが家庭でアゲハチョウの幼虫を見付け、それを学級で飼うことになった。その日から、休み時間や登校したときに幼虫の様子を観察するようになった。「虫かごの上までよじ登っている」「たくさんうんちをしている」「早くチョウになってほしい」など、幼虫の様子や子どもの思いや願いが聞こえるようになった。そして、「うんちがいっぱいとかわいそうだな」と言って排泄物を掃除したり、餌をあげたりして、一生懸命に世話を取り組む姿が見られた。さらに、虫かごとその蓋の境目でさなぎになっている様子を見て、掃除できないなと悩む姿が見られた。このように、学級には、生き物のことを思いやり、世話の仕方を工夫しようとする子どもがいる。

しかし、1年生の現段階では誰かに何かをしてもらうばかりで、相手に何かしてあげるという経験が少ない。2年生による学校案内では、2年生にいろいろな特別教室に連れていくつもらつた。手を引いて優しく案内してくれ、さらにはプレゼントにアサガオの種をもらったことで、そのあとの振り返りでは「2年生はやさしかった」、「2年生みたいになりたい」といった意見が出た。そこで、子ども自らが動植物と関わり、自分が働きかけることによって、動植物の変化や成長に寄与するという達成感をもたせたい。

(2) 題材設定について

本単元は学習指導要領内容（7）「動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもって大切にしようとする」を扱う。ここでは、植物を継続的に栽培し、その成長の様子を観察したり、世話の仕方について考えたり、それらについて交流したりすることを通して、自分の育てている植物が成長していることや世話を続けられた自分の成長に気付く単元である。本単元には次のような価値があると考える。

- 一人一鉢植物を栽培することで、植物に対する親しみの気持ちや世話する責任感をもつことができる。
 - 世話を通して、植物を大切にしようとする心を育み、生命の尊さや不思議さに気付くことができる。
 - 栽培活動を振り返り、多くの気付きがあったことから、自分自身の成長について気付くことができる。
 - 様々な植物の栽培活動を通して、植物によって葉や花の色や形が違うという植物の多様性に気付き、自分たち人間も多様であり、生命あるものを尊重しようとすることができる。
 - 観察を通して、数量についての知識及び技能を培ったり、気付いたことを伝えたり記録したりする表現方法を身に付けることができる。
- このように、植物を栽培することを通して、植物には生命があることに気付き、それらを大切に扱お

うとする気持ちを養いたい。また、友だちと交流することを通して、世話の工夫について考え、自分が植物に働きかけてそれらが成長していくことを見ることによって、「自分にもできた」、「やってよかった」という満足感や成就感をもち、さらには自己有用感をもたせるようにしたい。そして、自分に自信をもっていろいろなことにチャレンジして学校生活を送れるようにしてほしいとの思いから、この単元を設定した。

(3) 主体的な学びを実現するために

単元の導入では、2年生によるアサガオの種のプレゼントをきっかけにアサガオと出会う場面を設定した。種をプレゼントされ、自分のものとなることによって、アサガオとの関わりを自分事として捉えられ、「育ててみたい!」、「どうなるのかな?」というワクワクした気持ちが醸成されるようにしたい。そのあと、種をじっくり観察し、「はかせかあど」に観察したことを記録させる。自分の種を観察することで、今後のアサガオの成長に期待をもたせられるようにしたい。アサガオの栽培活動では、アサガオを一人一鉢栽培する。アサガオは丈夫で植物の栽培経験が少ない子どもでも比較的育てやすく、植物の発芽・開花・結実という成長過程を短期間で観察できる。1年生という発達段階において、このような成長過程をすぐに見られる教材は最適である。そして、一人一鉢という点で子どもが主体的にアサガオと関わろうとする機会をつくることができると考えられる。自分のアサガオと認識すれば、責任感をもって大切に世話をしようとするのではないかと考える。

栽培活動が始まると、日々の水やりや観察が行われていく。観察をする際には、予め「見る」「聴く」「嗅ぐ」「触る」「心で感じる」の諸感覚を働かせるように子どもに伝え、観察の観点を明確にする。また、観察時には、アサガオの葉や花の色や形、数に変化があるかどうかを確認するようにし、アサガオの成長の様子を気付くようにしたい。観察したことを記録したり共有したりする場面では、子どもが気付いたことを認めたり補足して説明したりするようにする。1年生のこの時期はまだ語彙や文章の表現が十分でない。そのため、子どもが自信をもって他者に伝えることができるよう、子どもの小さな気付きでも大いに認めて友だちに伝えるように助言する。また、気付きを言葉や文にするのが難しい子どもには、例文をいくつか提案して言語化の手助けをする。そのようにすることで、気付きをもっと伝えたいという気持ちをもたせたい。

さらに、子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めるにあたり、学習課題を提示していく必要がある。1年生の子どもにとって自ら学習課題を見出すことは困難なため、指導者側からの学習課題を提示する。それも、子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進められるように、「あさがおちゃん」と「あさがおぶらっく」からの手紙を活用する。「あさがおちゃん」と「あさがおぶらっく」からの手紙とは、子どもがアサガオの世話を意欲的に取り組もうとしたり、世話の仕方について考えたりする場を設けることがねらいの手紙である。「あさがおちゃん」からの手紙には、子どもがアサガオの世話を進んでしようという意欲を高められるような内面的に働きかけられるもの、「あさがおぶらっく」からの手紙には、アサガオの世話の仕方について見直したり、よりよい世話について考えさせたりするようなものを書くようにする。そうすることで、子どもが主体となって学習課題を設定できるようにしたい。

アサガオの世話を通して、アサガオに対する思いや願いが高まってくる時期を見計らい、「あさが

「おゆうびんたいむ」を設けるようにする。「あさがおゆうびんたいむ」とは、アサガオに対する思いや願いを手紙に書く活動のことである。アサガオの世話ををして思ったことや、アサガオがもっとこうなってほしいという思いや願いについて考え、アサガオに対する愛着の気持ちを高めたい。

また、アサガオやいろいろな植物について進んで関わることができるように、それらの興味・関心をもたせたい。そのため、「あさがおはかせこうなあ」をつくり、それらに関する図鑑などの書籍を子どもがすぐ手に取れるように環境を整えておく。子どもが栽培活動をする中で、それらについて気になることがあるときに書籍に触れられるようにすることで、主体的な学びに繋がると考える。

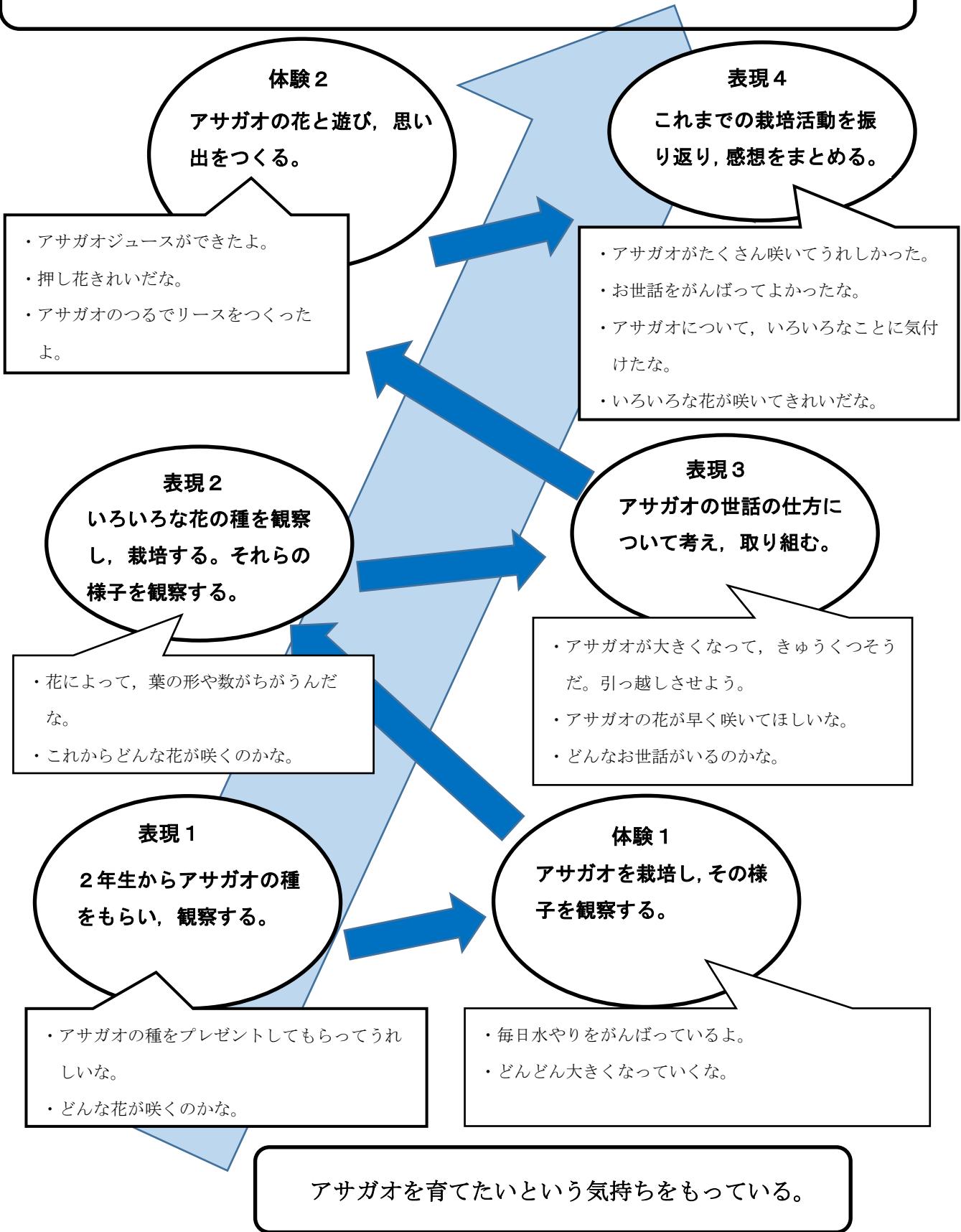
最後に、体験活動を多く取り入れられるようにする。色水遊びや押し花、アサガオリースなどの活動を行う。子どもが実際にアサガオに触れ、遊んだり作り出したりする活動を通して、アサガオに親しみをもって関わろうとする気持ちを養いたい。

7. 活動の流れ（全17時間 本時7/17）

学習の過程	【アサガオを育てよう！】 ① アサガオを栽培する。 ② アサガオの世話の仕方を考える。	【いろいろな花を育てよう！】 ③ いろいろな花を栽培する。 ④ いろいろな花の様子を比べる。
① 思いや願いをもつ	(1) 2年生から、アサガオの種をもらう。 ・どんな種だろう。 ・早く育てたいな。	(14) いろいろな種に出会う。 ・いろいろな形の種があるな。 ・どんな花を咲かせるのだろう。
② 活動や体験をする	(2) アサガオを栽培する。 ☆一人一鉢アサガオを栽培する。	(15) いろいろな花を栽培する。 ・ヒマワリ ・ホウセンカ ・マリーゴールド ・ワタ ・コスモス
③ 感じる・考える	(3)～(8) アサガオを観察したり、世話の仕方について考えたりする。 ・アサガオがどんどん大きくなっているよ。 ・アサガオがきゅうくつそく。	(16) いろいろな花を比べる。 ・葉の形や数がちがうな。 ・ワタとホウセンカは葉の形が似ているな。
④ 行為する・表現する	【本時】 (9)～(13) アサガオの花と遊んだり、アサガオとの思い出を振り返ったりする。	(17) いろいろな花との思い出を振り返る。 ・花の形や色は様々だったね。 ・どれも種をつくるんだね。

8. 活動のイメージ

植物の世話を通して、植物には生命があることや成長していること、多様であることに気付き、植物に親しみをもって関わっている。



9. 本時の活動

(1) 本時について

子どもたちは、自分たちで一人一鉢のアサガオを大切に育ててきた。毎日水やりをしたり、アサガオの様子を観察したりして、アサガオと積極的に関わっている。本時では、アサガオの花が咲き始めた頃を扱う。そこで、本時は、アサガオの観察を行い、成長の様子について交流する活動を行う。

ここでは、アサガオの成長の様子について気付いたことを交流し、アサガオに対する自分の思いや願いを明確にすることがねらいである。そして、アサガオの世話を最後までやり遂げられるようにしていくための時間としたい。

アサガオに対する自分の思いや願いをもつことができるよう、アサガオの様子を観察する。そのために、一人一鉢教室においておくようとする。観察の観点を確認し、見たり、触ったりしながら、アサガオの葉の形や数、背の高さについて気付きをもたせられるようにしたい。また、アサガオの成長の変化について捉えられるように、これまでのアサガオの成長過程がわかる写真を示すようとする。アサガオが成長してきたのは、自分たちの世話の成果だということにも気付かせたい。学習の最後には、「あさがおゆうびんたいむ」とし、アサガオに対する思いや願いをもたせたい。そして、アサガオに対する愛着の思いをさらに深めさせたい。

(2) 目標

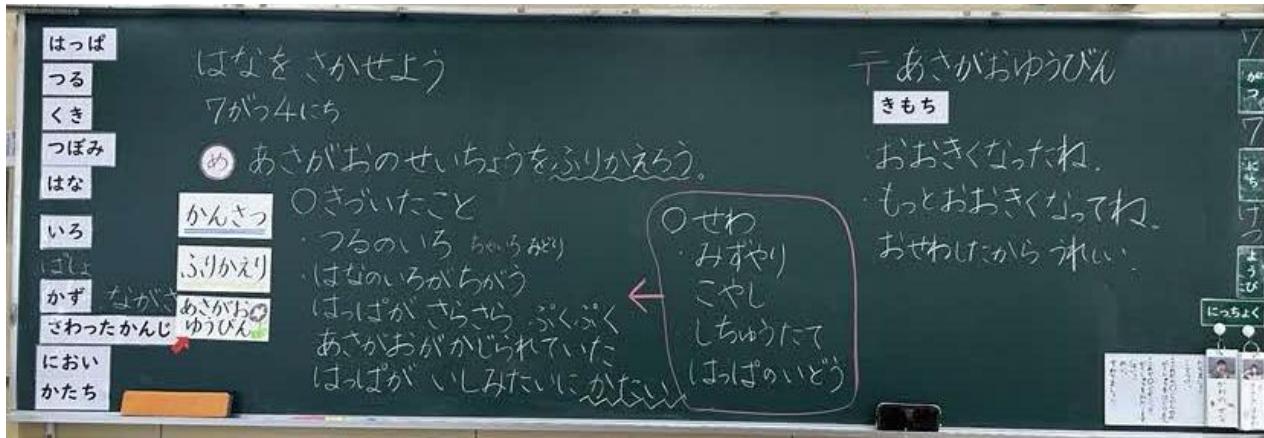
自分の育てているアサガオが成長していることに気付き、アサガオに対する自分の思いや願いをもつことができる。

(3) 展開

○学習活動	・教師のコーディネート ●本時の評価規準
○本時のめあてを確かめる。	<p>あさがおに てがみを かこう。</p>
○活動内容を確認する。 <ul style="list-style-type: none">・アサガオを観察する。・アサガオの世話を振り返る。・アサガオに手紙を書く。	
○アサガオの様子について伝え合う。 <ul style="list-style-type: none">・花が咲いたよ。・背が高くなったよ。・葉っぱも大きいよ。	<ul style="list-style-type: none">・アサガオを観察できるように、自分の育てているアサガオを教室においておく。・観察の観点を確認する。・アサガオの成長を捉えられるように、これまでのアサガオの様子を写真で示す。

	<ul style="list-style-type: none"> 近くの人に自分のアサガオの様子を伝えるようにする。 <p>●植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子について気付いている。</p> <p>(知識・技能①)</p> <ul style="list-style-type: none"> どんな世話をしてきたか想起できるように、これまでの活動の様子についてまとめたものを示す。 アサガオの世話について振り返ることで、子どもたちのこれまでの頑張りについて価値付ける。
○アサガオの世話について振り返る。	
<ul style="list-style-type: none"> 毎日水やりをしているよ。 引っ越ししてあげたよ。 支柱を立てたよ。 	
○あさがおゆうびんたいむ アサガオに手紙を書く。	<ul style="list-style-type: none"> 手紙を書くときのポイントについて確認する。 子ども全員がアサガオに対する思いをもつことができるよう、手本をいくつか示してから、手紙を書かせるようになる。 書くことが難しい子どもには、隣にあるアサガオに話しかけるように促してから、紙に書かせるようにする。また、手紙を書くときのポイントカードを提示するようにする。 <p>●アサガオに親しみや愛着をもったり、自分の関わりが増したことに自信をもったりしたことを実感し、生命あるものとして関わろうとしている。</p> <p>(主体的に学習に取り組む態度③)</p>
○本時の振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> 最後まで、アサガオの世話を続けられるように、意欲をかきたてるようにする。

10. 本時の板書



11. 指導を終えて

子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

成果

- ・自分のアサガオを教室に持てて来たことで、すぐに観察したり、友達のアサガオと比べたりすることができた。
- ・あさがおゆうびんたいむでは、手紙を書くときのポイントカードを提示したことで、全員がアサガオに対する思いや願いを書くことができた。
- ・子どもが観察して気付いたことを発表するときに、観察したものを作写真に撮って全体に示した。ある部分を拡大して示したことで、アサガオの細部まで観察することができた。
- ・アサガオを観察してわかったことを伝え合う活動を通して、アサガオの成長は自分たちの世話が寄与しているということや、アサガオを世話したことで自分たちも成長することができたということを実感し、アサガオに手紙を書きたいという願いをもつことができた。このようにして、子どもの考え方や思いを聞き、できるだけ子どもの思考に沿って授業を展開することができた。
- ・学習記録を掲示していたことで、学習したことが想起しやすくこれまでの活動を振り返ることができ、子どもの活動を価値付けることができた。

課題

- ・班の隊形で学習したにもかかわらず、子ども同士の交流をする場面が少なかったので、自分以外のアサガオを観察したり友達と対話したりする活動を取り入れてもよかつた。
- ・あさがおゆうびんたいむの時間が少し短かったので、子どもによっては十分にアサガオに対する思いや願いを書くことができなかつた。
- ・子どもが主体となって学習課題を設定できる手立てがあつてもよかつた。実際はあさがおちゃんやあさがおぶらっくからの手紙を提示して、子どもが学習課題を設定するきっかけをつくる場面もあった。しかし、指導者が子どものつぶやきや気付きを拾い上げて、それを学習課題につなげれば、より子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていけるようになったかもしれない。

観察の様子



「あさがおゆうびんたいむ」で手紙を書く様子



教室掲示



第2学年 生活科学習指導案

指導者 大阪市立粉浜小学校 奥野 瞳夫
天満 祥子

1. 日 時 令和7年6月26日（木） 第6校時（14:45～15:30）

2. 学年・組 第2学年1組 在籍28名 於：ふれあいルーム

3. 単元名 「ぐんぐん そだて わたしの 野さい」 内容（7）「動植物の飼育・栽培」

4. 単元目標

植物を継続的に栽培する活動を通して、これまでの経験を基に、植物の変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、植物が生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、植物に親しみをもち大切にしようとすることができるようとする。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 植物を継続的に栽培する活動を通して、植物が生命をもっていることや成長していることに気付いている。 2 植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に気付いている。 3 生き物への親しみが増し、上手に世話ができるようになったことに気付いている。 4 ICT機器を使って分かったことをまとめ、友だちに伝えている。	1 植物を継続的に栽培する活動を通して、植物の変化や成長の様子に関心をもって働きかけている。 2 植物の特徴などを意識しながら、育ててみたい植物を選んだり決めたりしている。 3 植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に着目して、観察したり世話をしたりしている。 4 植物の立場に立って関わり方を見直しながら、世話をしている。 5 育ててきた植物のことや心を寄せて世話をしてきたことなどを振り返り、表現している。	1 植物を継続的に栽培する活動を通して、植物に親しみをもち、大切にしようとしている。 2 よりよい成長を願って、繰り返し関わろうとしている。 3 植物の特徴、育つ場所、変化や成長の様子に応じて、世話をしようとしている。 4 生き物に親しみや愛着をもったり、自分の関わりが増したことに自信をもったりしたことを実感し、生命あるものとして関わろうとしている。

6. 指導にあたって

(1) 子どもの実態

本学年の子どもは、自然に関わる活動が大好きで、春の遠足ではシロツメクサを摘んで指輪を作ったり、タンポポを見付けたりしていた。1年生の時にアサガオやチューリップを栽培した経験があり、植物の成長には水やりや支柱立てなどの世話を必要であることを学習している。

昨年度に栽培したアサガオでは、あさがおちゃんとあさがおぶらっくからの手紙を読んで、観察の視点や世話の仕方に気付くことができた。毎朝水やりに行ったり、アサガオの成長を観察カードに書いたりして、自分のアサガオを大切に育てていた。

夏休みはアサガオを家に持ち帰り、家庭で大切に世話をしてたくさんの花が咲いたそうだ。2学期にアサガオの様子を嬉しそうに話していた。花が終わるとアサガオからの種のプレゼントを受け取った。あさがおちゃんから種をどうしたらいいか「みんなで考えてほしい」とお願いされた。その種は、新入生にプレゼントすることに決め大切に保管した。

最後に、花が枯れ、種を採った後も最後まで大切にアサガオを育てたことから、「アサガオ、ありがとう」という思いをもって栽培活動を終えることができた。

2年生になってから、1年生の時に植えたチューリップと校内の春の動植物について観察する活動を行った。1年生の時の経験を生かし、子どもたちは観察するものを見たり触ったり匂ったりして文章にまとめた。しかし、文章表現には個人差があり、特に観察して思ったことの内容に差が見られた。また、変化に気付ける子どもは少なかった。

(2) 題材設定について

本単元は学習指導要領内容（7）「動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にしようとする」を扱う。ここでは植物を継続的に栽培する活動を通して、植物の変化や成長の様子に関心を持って働きかけ、植物が生命をもっていることや成長していることに気付く単元である。本単元には次のような価値があると考える。

- 自分が野菜の世話をすると野菜が成長し、満足感や達成感を感じることができる。
- 「野菜を大きく育てたい」「おいしい野菜が食べたい」という思いを実現するために、自主的に育て方を調べようとする気持ちをもつことができる。
- 野菜の様子や成長、変化や世話の仕方を伝える方法を身に付けることができる。

このように、植物を育てるにはたくさんの世話が必要なことや、植物の変化や成長の様子を知ることで植物には生命があり大切にしてほしいという思いから、この単元を設定した。

(3) 主体的な学びを実現するために

単元の導入では、子どもたちが継続して野菜を世話できるようにする必要がある。そのために、1年生でアサガオを栽培したことを思い出し、毎日の水やりや支柱を立てるなど世話が必要なことを思い出す。また、野菜に関する本を用意し、子どもが主体的に野菜の世話の仕方を調べられるようにする。栽培を続けていく中で、「野菜を大きく育てたいな」「どんな世話が必要かな」という子どもの願いや「まっすぐ立たない。困ったな」「虫がついた。どうしよう」という困ったことなどの意見がたくさん出てくることが考えられる。それらをカードに記録して共有できるようにする。そして、子どもの願いを達成するために農家の方に助言を受けられるようになる。野菜づくりのプロに助言を受けることで、子どもたちはより「立派な野菜が実るように世話をがんばろう」という気持ちになると予想される。

次に、ここまで野菜の成長や世話の工夫、調べたり聞いたりして分かったことの発表会をする。これまでに記録してきた観察カードや写真を使い、友だちに伝えられるようにする。それぞれの世話を伝えたり、感想を言ってもらったりすることで、この後の栽培活動の意欲へつながると思われる。

野菜の収穫では、育てた野菜によって収穫時期が異なるので、事前に本で調べたり農家の方に聞いたりしたことを基に判断させる。収穫した野菜は家に持ち帰り、食べるようになる。家庭には事前に調理の協力を依頼しておく。また、自分で育てた野菜をどんな調理をして食べたいかレシピを調べ、準備もしておく。そうすることでより収穫した喜びが増すはずである。

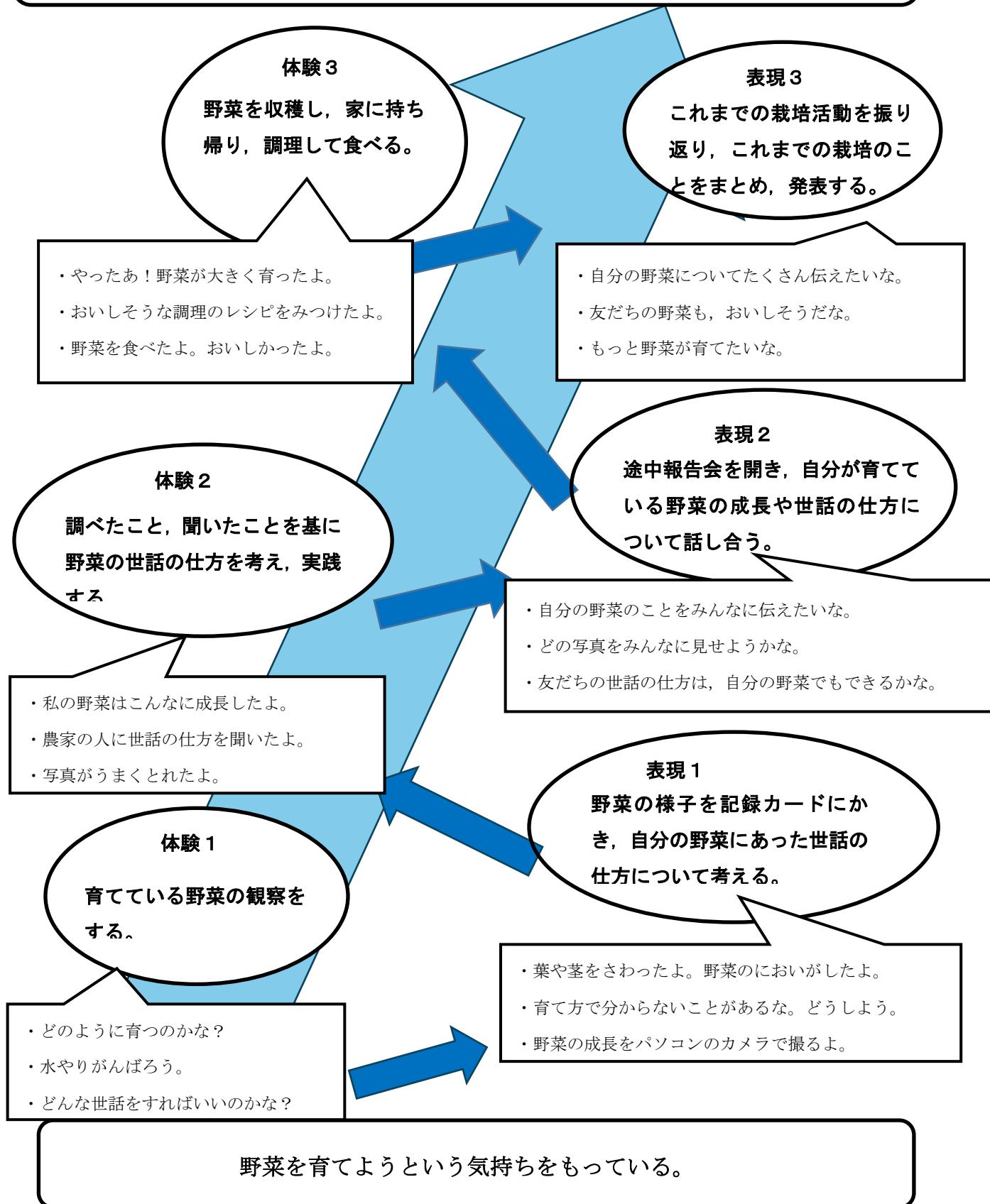
報告会では、同じ野菜を育てた子どもどうしのグループで報告する。報告では、野菜の収穫までの様子、家で調理し食べたこと、世話についての感想を伝えるようにする。苦労して育てた野菜が生命をもっていることや成長していることに気付き、動植物を大切にしようという気持ちを養いたい。

7. 活動の流れ（全10時間　本時6/10）

学習の過程	【野さいを そだてよう】 ① 野菜の苗を植える。 ② 観察したことを観察カードに書く。また、学習端末で写真を撮る。	【野さいの ようすを つたえ合おう】 ③ 野菜を収穫する。 ④ 報告会をする。
①思いや願いをもつ	(1) 自分の知っている野菜を思い出し、自分が育てる野菜を決める。 ・ナス、オクラ、ピーマン、キュウリ、枝豆	(7) 収穫した野菜がどんな食べ方があるか調べる。 ・本にこんなレシピが載っているよ。ためしてみたいな。
②活動や体験をする	(2) 野菜の世話をする。 ・毎日水やりをするの大変だな。 ・花が咲いたよ。この後どうなるのかな。 (3) 農家の人に話を聞く。 ・これからどんな世話をしたらいいのかな。	(8) 野菜を収穫する。 ・たくさん採りたいな。 ・友だちの野菜が採れたよ。私の野菜はまだかな。
③感じる・考える	(4) (5) 観察したこと、農家の人に教えてもらったことをまとめ る。 ・自分の野菜が成長したことを観察カードにまとめたよ。みんなに知 らせたいな。 ・農家の人に自分の野菜について教 えてもらったことを伝えたいな。	(9) これまでの活動を振り返り、報告会の計画を立 てる。 ・野菜が大きく成長し、たくさん採れたよ。 ・お家でこんな料理をして食べたよ。
④行為する・表現する	(6) 観察したこと、農家の人に教 えてもらったこと、調べたことの途 中報告会をする。【本時】 ・野菜がこんなに成長したよ。 ・自分の野菜はこんな世話が必要つ て農家の人に教えてもらったよ。 ・たくさん実がなってほしいな。	(10) 世話をしたこと、収穫したこと、調理したことの最終報告会をする。 ・こんなお世話がよかったよ。 ・花が咲いたら実ができたよ。 ・野菜を使った料理を写真に撮ったよ。

8. 活動のイメージ

野菜の世話をすることで、植物が生命をもっていること成長することに気付き、植物を大切にしようとする気持ちをもつ。



9. 本時の活動

(1) 本時について

子どもたちは前時までに野菜の成長を写真や観察カードに記録したり、野菜の世話の仕方を本で調べたり、農家の方に話を聞いたりしている。野菜は苗を植えてから6週間が経っているので、種類によっては花が咲いたり小さな実をつけたりしているものもあるだろう。また、世話に関しては支柱を立てることや肥料をやること、脇芽を摘むことを学習しているだろう。それらを育てる野菜ごとのグループでまとめてきた。

本時はそれらを友だちに報告する。指導者は子どもの報告を板書に整理し、子どもたちが自分の野菜と友だちの野菜を比べられるようにする。共通点や相違点を見付け、これから野菜の世話について考えられるようにする。

子どもたちの報告については、写真や言葉だけでなく動画も利用させたい。動画で野菜の成長を具体的に伝えることで、より友だちに詳しく分かってもらえることを期待したい。また、事前に動画を用意することで発表に苦手意識をもつ子どもも活躍できる場を作ることができると考えられる。

(2) 目標

自分の野菜の成長や変化、世話の仕方を報告し、自分の野菜と友だちの野菜の報告を比べることで、共通点や相違点に気付くことができる。

(3) 展開

○学習活動	・教師のコーディネート ●本時の評価規準
○全員が育てているミニトマトの成長、世話を確認する。 ・苗を植えた。 ・支柱を立てた。 ・花が咲いた。	・水やり以外にもたくさん世話があったことを確認する。 ・苗を植えた時よりも葉が増え、背たけも高くなりたくさん成長による変化があったことを、写真を見ながら振り返る。
○本時のめあてを確認する。	<p style="text-align: center;">ぐんぐん そだった やさいのようすを つたえよう</p>
	・各グループで事前に撮影した写真や観察カードを大型モニターで見せながら野菜の様子や世話について説明する。 ・野菜の様子は動画も用意する。 ・報告したことを野菜ごとに黒板で整理する。 ●野菜の様子や世話について、ICTを使って発表している。 (知識・技能④)

<p>○自分の野菜との共通点や相違点を見付ける。</p> <p>○本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の野菜と同じところもあれば違うところもあるな。 ・これからも世話を続けていきたいな。 ・花が咲く野菜が多いな。 ・いつ実を探ができるかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表をまとめた板書を確認し見付け、共通点や相違点をワークシートに記入するように伝える。 ・見付けたことは発表し、考えを共有できるようにする。 <p>●【思】自分の野菜と友だちの野菜の共通点や相違点に気付き、今後の野菜の世話に生かそうとしている。（ワークシート・発言）</p>
--	---

10. 本時の板書

ぐんぐんそだったやさいのようすを つたえよう。					
	キュウリ	ナス	ピーマン	オクラ	えだまめ
花	さく 黄色の花	さく むらさきの花	さく 白い花	さく うす黄色の花	さく 白い花
み	みどりのみ だけだけ とれた	むらさきのみ とれた	みどりのみ とれた	とれていない	みどりのみ
おせわ	水やりをいはげる わきめをとった。	水やりをいはげた さいしょのみをとった。	水をいはげる さいしょのみをとる。	水やりをしてない さいちにみどる。	水やりをしてない。

ワークシート

ぐんぐんそだったやさいのようすを つたえよう
2年 くみ ばん 名前()
自分のやさい
○にているところ
.....
○ちがうところ
.....
○これからしてみたいこと
.....

11. 指導を終えて

子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

成果

- ・子どもたちの「もっと大きく育てたい」という願いから農家の方に育て方のコツを教えていただいた。より良いお世話の仕方を知ったことで、育て続ける意欲につながった。
- ・Teams を使うことで、遠方の農家の方に直接育て方を教えてもらうことができた。
- ・一人一台端末を活用し、写真で野菜の成長を記録したり、学習園での活動の様子を動画で撮り伝え合ったりすることができた。
- ・保護者に協力してもらい、収穫した野菜を家で食べることができた。

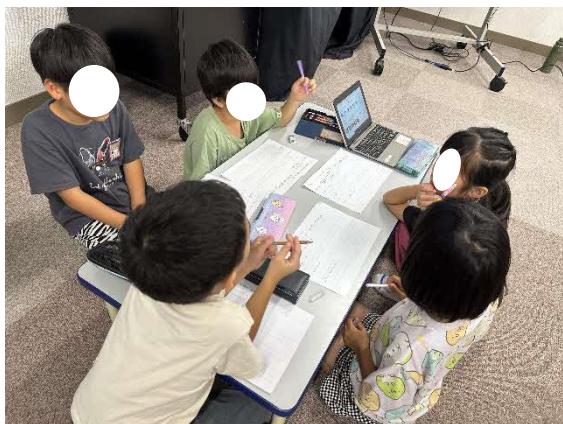
課題

- ・土の管理、雑草抜き、水やりなど、子どもだけでは管理できない部分がある。
- ・それぞれの野菜の成長にはらつきがあり、一斉に観察に行くことが難しい。(同じ日に苗を植えて、ピーマン、ナス、キュウリは早め、オクラ、枝豆はその3つの後から収穫だった。)

発表の様子



ワークシートに育て方の同じところや違うところを書きこむ様子



第3学年 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 大阪市立粉浜小学校 辻本 朋子
浦 喜美子

1. 日 時 令和7年10月9日（木）6時間目（14:45～15:30）
2. 学年・組 第3学年1組 在籍27名 於：3年1組 教室
3. 単元名 『思いやり』のあるまちっていいな」
4. 単元目標

学校やまちのバリアフリーについて体験的に学ぶ活動を通して、様々な状況や立場にある人がいることに気付き、相手の気持ちを想像し、自分たちができる考えるとともに、地域の一員として相手を思いやり、共に生活しようとする気持ちをもつことができるようとする。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>1 様々な立場の人の気持ちを想像し、それに寄り添った行動をとることが、思いやりであることを理解している。</p> <p>2 地域の方や専門家の方から話を聞いたり、情報を選んだりして情報を収集している。</p> <p>3 思いやりのある行動とは、相手の立場に立って、自分ができることを実践することだと理解できたのは、探究的に学習してきたことの成果であると気付いている。</p>	<p>1 まちや駅の中のバリアフリーを探したり、まちの人などにインタビューしたりする活動を通して、次に取り組みたい課題を明らかにしている。</p> <p>2 まちのバリアフリーについてよく知るために、観察したり、インタビューしたりする内容を考えている。</p> <p>3 観察したり、インタビューしたりして集めた情報を比較、分類したり、関連付けたりして、次の活動につなげている。</p> <p>4 粉浜のまちを思いやりにあふれたまちにするために、様々な状況や立場にある人たちの気持ちを想像して、自分たちができることについて考えている。</p>	<p>1 まちや駅の中のバリアフリーを探したり、まちの人などにインタビューしたりする活動を通して、課題を見付け出そうとしている。</p> <p>2 まちの中を福祉的視点で観察したり、様々な人の考え方や思いに触れたりすることを通して、自分と異なる立場の人の存在に気付き、自分の役割を果たそうとしている。</p> <p>3 自己の取り組みを振り返ることで、地域の一員として、人を大切にし、共に生きていくこうとする気持ちをもつている。</p>

6. 指導にあたって

(1) 子どもの実態

本学年の子どもたちは、2年生の生活科の学習で「まちの人のためにある場所を探そう」というめあてをもってまちたんけんに出かけ、地域の中にたくさんの公共施設があることを知った。また、公共施設だけでなく、なじみのあるお店についてもたんけんした。そして、さらに「もっとお店の人となかよくなつて、お店のステキを見つけよう」という意欲をもち、友だちと協力してインタビュー活動を行った。見つけてきたお店の人の「ステキ」を伝える発表会を開き、自分たちのまちには素敵なおじまんできるものがたくさんあることを実感し、これらの活動を通して、粉浜のまちに愛着のあることができた。

3年生になり、理科や社会など新しい学習に加え、総合的な学習の時間の活動にも取り組んできた。社会科「わたしたちのまちのようす」の学習では、自分たちのまちの様子はどうなっているのかと疑問をもち、土地の使われ方や交通の様子、神社や寺など古くから残る建物などについて調べ、絵地図にした。また、「工場ではたらく人びとの仕事」の学習に関連して、「満月ポン」工場を見学したときには、2年生のまちたんけんでの経験を生かして、見学をして知りたい考えたり、見付けてきたことを分類しながら整理したりすることができた。さらに、カイコの飼育・観察活動を通して、カイコの生態についての疑問点を学級文庫や学校図書館の資料で調べたり、調べたことをカイコの本としてまとめたりするなど、主体的に探究活動に取り組む姿が見られた。

このように、自分が興味のある課題に対しては、前向きに取り組み解決しようとする意欲や態度が見られる一方、あまり興味のもてない場合には、課題解決のためにいろいろな方向から捉えたり、関連付けて考えたりする力が十分でないためか、自力で解決することをあきらめてしまうことがある。

さらに、相手の気持ちを想像したり、相手を思いやったりする気持ちが十分育っていないという課題もある。単元導入時に行ったアンケートでは、「自分や家族が、まちの中でこまっている人を助けているのを見たことがありますか。」という項目に、「当てはまる」と回答した割合は78%であった。しかし、道徳科の授業の際に、今の自分は「人に親切にすること」と、「人から親切にしてもらうこと」のどちらが多いかを問うと、半数以上の子どもが、「人から親切にしてもらうことが多い。」と回答している。また、校外学習で電車を利用した際には、電車に乗り込んだ途端、先を争うように座席に座つたり、優先座席は空けておこうという意識はあるものの、その前に並んで立つせいで、座席を塞いでしまったりする子どもがいた。

(2) 題材設定について

本单元は、粉浜のまちで生活している車いすユーザーの方との出会いをきっかけに、自分たちのまちを当事者の方の視点で調査・観察し、バリアフリーとはどういうことなのかを理解することができるようにするものである。

車いす体験では、車いすユーザーの方から聞いたことを実際に車いすに乗って体験してみることで、当事者の方の感じ方や視点について実感を伴って理解することができるだろう。そして、もっと調べてみたいという意欲をもち、さらにまちの中を当事者の視点で観察してみたり、車いすユーザー以外の人

にとって、暮らしやすいまちになっているのかと疑問をもったりするなど、次の探究活動を自ら設定していくだろうと期待している。

3サイクルと4サイクルでの情報収集の場面では、身近な存在である家族やまちの人、さらにこれまでの生活の中であまり関わりがなかったであろう住之江支援学校の先生や住之江区社会福祉協議会の方に、インタビューする機会を設ける。福祉の専門家の方から話を聞き、様々な考え方があることに気付いてほしい。さらに、課題解決のために必要な情報を収集する自分たちを、様々な人が支えてくれていることに感謝の気持ちをもてるようにならう。

また、住之江支援学校に通う子どもと交流することを通して、自分には無かった新しい気付きと出会い、思いやりの態度を身に付けることができると考え、本題材を設定した。

(3) 主体的な学びを実現するために

本単元では、子どもが自分の学びの過程や、現在の学びの位置を常に確認することができるよう、探究ペタを教室に掲示する。自分たちの活動の成果を、振り返りの内容や板書等から具体的に見直すことで、自ら学びを進めていることに自信のあることができると考える。また、子どもたちにとって自然なストーリーである学習展開を、単元を通して進めていくために、毎時間の活動状況の振り返りを積み重ねていき、子どもたちから解決したい課題が出てくるように進めていくようとする。

まず、導入で、まちの様子をたんけんしに行く。1学期の社会科でのたんけんとは違い、マークや視覚障害者用誘導ブロックなど体の不自由な人のためにあるものを見付ける、という福祉的視点をもたせて、まちの中を歩いてみる。その際、地域活動支援センターである衣料品店の辺りもたんけんし、店の入り口脇にある、国際シンボルマークを見付けることができるようにしておく。このピクトグラムは、車いすの絵柄だが、車いすユーザーだけでなく様々な障がいのある人々が利用できる施設であることを示す世界共通のマークである。3年生の子どもたちにとって、見るだけで障がいのある人のためのマークだと理解しやすいため、発見しやすい。単元導入時のアンケートでは、「車いすに乗ったことがある。」と回答した子どもの割合は、17%であった。しかし、昨年度、足を怪我して車いすを使用していた子どもがいるため、「車いすに乗っている人や乗っていた人が身近にいる。」と回答した割合は52%であった。本単元では、子どもたちの学びがより焦点化されるよう、学習対象を車いすユーザーに絞る。学習対象を明確にすることで、子どもの主体的な学びが実現されると考える。そのために、まちたんけんで集めた情報を整理した後、車いすユーザーの当事者である地域活動支援センターの代表の方から、お話を聞く機会をもつ。このように、地域で生活する当事者の方と出会った後、車いす体験へつなげていく。そうすることで、自分のまちで暮らす当事者の方を思い浮かべながら車いすを体験でき、「自分の知っている人が、こんなことに困っているんだな。」と、より多くの気付があるのではないかと考える。さらに、「他にも困っていることがあるんじゃないかな。」という疑問が子どもたちから出てきたら、「粉浜のまちは暮らしやすいのか調べてみよう。」と、次の探究のサイクルへと進めるように促したい。

当事者の方が利用するまちの中にある施設のうち、まずは子どもたちにとって身近な駅について

調べてみる。駅は、多様な人たちのことを考慮してデザインされているため、子どもたちは、エレベーターや国際シンボルマーク、インターホンや拡張改札などの工夫を見付けることができると考える。そこで、「駅は〇〇さんにとって使いやすいことが分かったけれど、他の人にとっても、使いやすいのかな。」と問い合わせ、調査の対象をまちの人へと広げていく。

まずは、家族に、ベビーカーを使用していた頃のことについてインタビューしてみる。そして、まちの中で、車いすやシルバーカー、杖やベビーカーなどを使っている人にもインタビューをして、より多様で幅広い年代の声を聞けるようにする。

また、地域に住む障がいのある子どもと楽しく交流するために、どんな歌を歌うと喜んでくれそうか、一緒にゲームを楽しめるようにルールをどう工夫すればよいかを考えてみる。交流の際に、住之江支援学校の先生にもインタビューをし、障がいのある人がまちの中でどのように生活しているのかを知ることで、「自分たちができそうなことはやってみよう」という意識をもつきっかけとしたい。

また、住之江区社会福祉協議会の方にもう一度来校して頂き、車いすユーザーの方が活躍されている話や、他の障がいについて、住之江区のボランティア活動等の話を聞く。福祉教育では、福祉の概念を分かりやすく伝えるために、「ふだんの暮らしをしあわせに」というフレーズが用いられる。単元の最後には、「自分の小さなおてつだいで、暮らしやすくなる人がいるんだ。」「誰かの役に立ちたいな。」と思いやりの心を深め、粉浜のまちの一員として地域とつながり、関わっていこうという気持ちをもたせたい。

7. 活動の流れ（全30時間 本時12/30）

課題の設定

まちの中にいる体が不自由な人のためのものをさがそう。
(思考・判断・表現①)

情報の収集

車いすユーザーの方のお話を聞こう。
(知識・技能①②)
車いす体験をしてみよう。
(知識・技能①)

整理・分析

実際に体験して分かったことを整理する。
(思考・判断・表現③)

まとめ・表現

車いすユーザーの方は、粉浜のまちで暮らしありやすいのかな？
(主体的①)

まちや駅の中の施設を調べたいな。
(思考・判断・表現①)

車いすユーザーの方が駅を使うときはどうだろうか。
(思考・判断・表現②)

駅を調べ、見つけたことを整理する。
(思考・判断・表現③)

他の人にとっても、駅は使いやすいのかな。
粉浜のまちは、人にやさしいまちかな？
(思考・判断・表現①)

家の人やまちの人は、どう思っているのだろうか。聞いてみたいな。
(主体的①)

家のひとまちの人には、駅にインタビューをする。
(思考・判断・表現②)

インタビューをして分かったことを整理する。
(思考・判断・表現③)

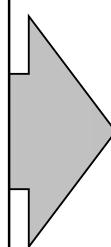
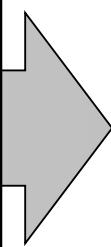
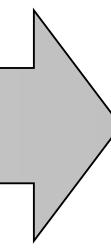
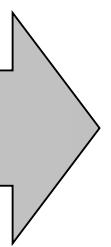
自分たちができるうことはないかな。
(主体的②)

専門家の方には、もう一度話を聞いてみたい。
(主体的①)

社会福祉協議会の方の話を聞き、自分にできることについて考える。
(思考・判断・表現④)

車いす当事者の方と出会って、感じたことや考えたことを整理する。
(知識・技能③)

自分たちの学習活動を振り返る。
(主体的③)



8. 本時の活動

(1) 本時について

子どもたちはこれまで、車いすユーザーの方が生活の中で感じる困難さや、暮らしやすいようにするための工夫などについて話を聞いたり、実際に車いすを体験したりしてきた。それらの活動を通して、車いすユーザーの方は粉浜のまちについて暮らしやすいと感じているのかという疑問をもち、まちや駅の施設を調べてみたいという思いから、当事者の方が駅を使いやすい工夫を調査した。

前時では、住吉大社駅で見付けてきた工夫を交流する。その際、見付けた工夫がよく分かるように写真で示し、当事者の方にとってどのような利点があるのかを考えさせるようにしたい。

本時では、駅で見つけた工夫と利点についてもう一度振り返ることで、駅とはどんな場所だと言うことが出来るのかを考えられるようになる。また、多目的トイレに国際シンボルマークとそれ以外のピクトグラムも表示していたこと等から、駅は車いすユーザー以外の人にとっても使いやすいのではないか、という点に気付くことを期待したい。そして、まちの人にも、粉浜のまちをどう思っているのか聞いてみよう、と次の活動へつなげられるようになる。

(2) 目標

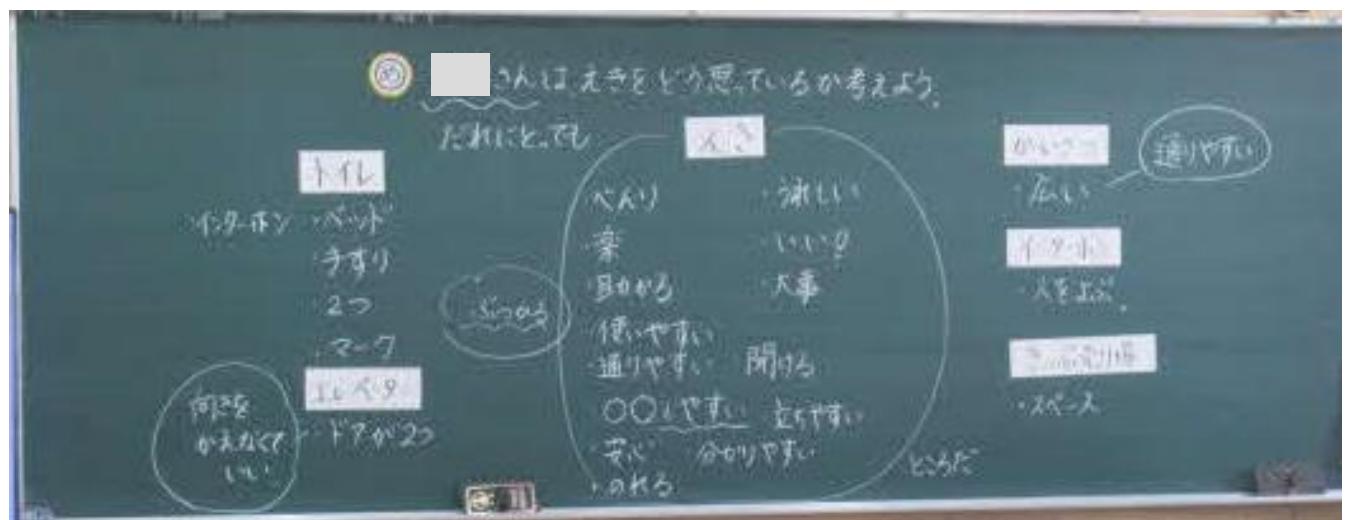
駅で見付けた工夫を振り返り、駅は車いすユーザーにとってどのような場所なのかを考えることができる。

(3) 展開

○学習活動	・教師のコーディネート ●本時の評価規準
○これまでの学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none">これまでの学びを振り返られるように、学習の流れをまとめたものを教室内に提示しておく。駅で集めた情報を、ワークシートを見て振り返る。
○前時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none">駅で見付けてきた工夫と、その工夫のおかげで当事者の方がどのように助かるのかを振り返る。
○本時のめあてをつかむ。	<p style="text-align: center;">○○さんにとって、えきはどんなところか考えよう。</p>
○駅はどのような場所だと思うか、付箋に書き出していく。	
<ul style="list-style-type: none">グループ交流の前に、個人の考えを持つ時間を作るようにする。前時に情報共有したことをもとに、駅はどのような場所だと言えるか考えるようにさせる。書くことに抵抗がある子どもには、前時に書いた振り返りを読み返させたり、前時の振り返りの際に取り上げた子どもの発言を思い出させたりする。	

○グループで交流する。	・交流しながら、付箋を仲間分けして整理させる。
○全体で交流する。	・グループで出てきた考えを発表させる。 ●観察したり、インタビューしたりして集めた情報を比較、分類したり、関連付けたりして、次の活動につなげている。 (思考・判断・表現③)
○本時の振り返りをする。	・次の見通しをもてている子どもの考えを取り上げる。 ・活動の成果を認め、次時の活動への意欲を高められるようにする。

9. 本時の板書



10. 指導を終えて

子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

成果

- ・車いすユーザーの方と出会ったことで、当事者の方の気持ちを知ろうと自ら学習活動に取り組む姿が見られた。
- ・体験活動の後に振り返りをしたことで、子どもたちが何を学んだかを自覚することができた。本時では、駅で見つけた工夫を動作化して振り返ったことで、駅は当事者の方にとってどんな場所といえるのか考えやすくなった。
- ・グループ交流では、国語科で取り組んできた、司会を中心に話し合いを進めていく経験を生かすことができた。
- ・探究ペタをもとに、前時の学習を毎時間の導入時に振り返ることで、子どもたちが次の活動をイメージしやすくなり、本時の学習のめあてを明確にすることができた。
- ・活動の中で考えが浮かばなかったり、迷ったりするときにも、ペタを使って振り返らせることで、単元の目的を再確認でき、考えをはつきりさせることができた。

課題

- ・グループ活動時、6人のグループは話し合うには人数が多くなったため、話し合いの人数や場を工夫する必要があった。
- ・より主体的な子どもの姿が發揮されるようにするために、子どもたちの学習意欲と深く結びつくようなめあてを指導者がもっておく必要がある。

ペタを使ってこれまでの学習の流れを振り返る様子 駅で見つけた工夫を動作化して確かめる様子



駅は当事者の方にとってどんな場所と言えるか、付箋に自分の考えを書きこむ様子



グループで意見を交流し、仲間分けをしている様子



全体交流の様子



第4学年 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 大阪市立粉浜小学校 房 菜々希
小笠原 空渡

1. 日 時 令和7年11月12日（水） 第5時限目（13:50～14:35）
2. 学年・組 第4学年2組 在籍34名 於：4年2組 教室
3. 単元名 「地震、津波から粉浜を守り隊！」
4. 単元目標

地震や津波の被害や避難の様子を調べる活動を通して、地域にも災害の危険があることに気付くとともに、命を守るために備えや行動の大切さを知り、自分たちにできる備えについて考えたり伝え合ったりすることで、自分たちの命を守るだけでなく、地域の人々や家族の命や暮らしを守る意識をもつことができるようにする。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 地震、津波の基本的な知識をもとに、疑問や課題をとらえている。	1 地震や津波の課題について、自分なりの問い合わせや疑問をもち、解決に向けて考えをまとめるとしている。 2 インターネットで調べたり、調査したりする中で必要な情報を集めて整理している。	1 地震や津波に関する疑問や課題をもち、自分から調べたり話し合ったりしようとしている。 2 インターネットで調べたり、調査したりしたことをもとに、課題を見つけ、自分たちにできることは何か考えようとしている。
2 本、地図、インターネット、人などから災害に関する必要な情報をを集めている。	3 地域の現状や課題をふまえ、提案や発信の方法を工夫している。	3 地域の人々の命や暮らしを守るためにどんな行動ができるか考えようとしている。
3 図や表、地図などを使って、集めた情報をわかりやすく表現している。	4 調査や話し合いをもとに、自分たちにできることをまとめ、発信している。	4 学んだことを発信したり、これから的生活に生かそうとしたりしている。
4 災害から命を守る行動を自分の生活と結びつけ、自分の考え方や学習したことをまとめ、伝えている。		

6. 指導にあたって

(1) 子どもの実態

本学年の子どもたちは、昨年度の総合的な学習の時間では、「粉浜商店街きらり☆探検隊」をテーマに活動を進めてきた。生活圏の一部である粉浜商店街の「とっておき」を見付けに出向いたり、商店街会長さんや店の人の思いや願いについて触れたりすることで、「自分たちは粉浜の地域の一員だ」という意識をもち、地域を大切にしていこうという意欲が育まれてきた。

4年生では、社会科の学習で自然災害についての学習を進めてきた。そのため、日本で起きている自然災害には様々なものがあるということは理解している。また、地震、津波が起きた時の避難訓練を毎年行い、教室内から避難するときにどう行動すればいいのかはわかっている。しかし、具体的な対策や、教室以外で起きた時の行動を知らない子どもが多く、近年大阪で大きな災害が起きていないことから、自分たちは安全だと他人ごとのように思っている子どもが多くいる。一方で、南海トラフ地震のニュースや地震速報を観るたびに漠然とした不安だけを抱いている子どももいるなど、個人差が大きい。そのため、災害を身近なものとして捉え、備えの必要性を理解することが大切である。

これまで、他教科で調べ学習を進める際には、自分で調べたことをグループで共有してまとめる活動を行ってきた。調べ始める段階から学習に見通しをもって、具体的な活動内容を考えて実行していく子どももいれば、自ら考えて進めることに苦手意識があり、周りの友だちの動きに合わせているだけの子どももいる。今後、自ら考え、判断し、発信しようとする力がますます必要となるため、総合的な学習の時間を通して、場面設定や課題提示の工夫、ゲストティーチャーとの連携などを行うことで、防災を自分自身の課題として捉え、自分の命を守るためにだけでなく、家族や身近な人の命、そして粉浜のまち、くらしを守るために、学習したことを他の人に伝えたいと思うことができるようになる必要がある。

(2) 題材設定について

本校のある地域は、南海トラフ地震による強い揺れや津波の被害が懸念されており、将来的に大規模な自然災害に見舞われる可能性が高いとされている。児童一人ひとりが自分や家族、地域の人々の命を守るためにどのような行動を取るべきかを考え、具体的な備えについて主体的に学ぶことが求められている。そこで本単元では、「粉浜を守り隊!」と題し、まず地震や津波のメカニズム、災害時に起こりうる被害について調べ、基礎的な知識を身につけることから学習をスタートする。その上で、想定される地震の規模や地域の被害、地域の防災対策や避難場所の実態について区役所の防災担当者の話を聞いたり、自分たちの住んでいる地域のハザードマップをもとに実際に歩いて調査したりするなど、地域と深く関わりながら学びを進める。さらに、もしものときに自分はどのような行動を取るべきか、家族や地域の人たちとどう助け合えばよいのかについて、自分ごととしてとらえ、意見を出し合いながら考

える活動を取り入れる。最終的には、学んだことをもとに「粉浜（自分たち）を守るためにできること」をテーマにまとめ、発表することで、学びを共有し、自他の命を守る意識をさらに高めることをねらいとしている。防災の学習を通して、災害に備える力や判断力を身につけるとともに、地域とつながりながら生きることの大切さにも気付かせたいと考え、本題材を設定した。

（3）主体的な学びを実現するために

本単元では、単元の導入時に過去に起こった震災の動画や写真を見せながら「今このような地震が起きたらどうするか」と問いかけ、自分ごととして捉えられるような仕掛けを作る。まずは地震について知っていることをイメージマップに書き出し、交流する。その情報だけでは、自分や家族の命、そして地域を守ることができないことに気付き、守っていくためにどうしていけばいいのかという大きな課題をもたせる。知識として地震の仕組みや二次被害についてインターネットや本から学びつつ、過去の震災の被害、体験談を、家族、先生、ゲストティーチャーなど身近な人から話を聞く活動も取り入れて、自分の生活と結びつきやすいように様々な出会いを設定していきたい。

そして今後予想されている「南海トラフ巨大地震」について調べ、日本、大阪、住之江、粉浜とどのような被害が想定されているのか、そしてどのような備えが必要になってくるのかについて区役所の方をお招きして話を来ていただく。また、そのお話をもとにして学校や地域や家の中で危険な場所がないかを自分の目で確かめる活動も取り入れる。実際に歩いて気付いたこと、調べてきたこと、得た情報を PMI シートに整理していく。

（参考例）

☆粉浜小学校（理科室）

P（プラス）	M（マイナス）	I（アイデア）
運動場にすぐ出られる。 水道が多い、近い。 消火器が近い。	薬品が多い。 割れるものが多い。 火が危ない。	消火器の使い方を知っておく。 準備室にはいかないようにする。 何か固定できるものを用意しておく。 火はすぐに消すように、ポスターなどで呼びかける。

☆粉浜○丁目

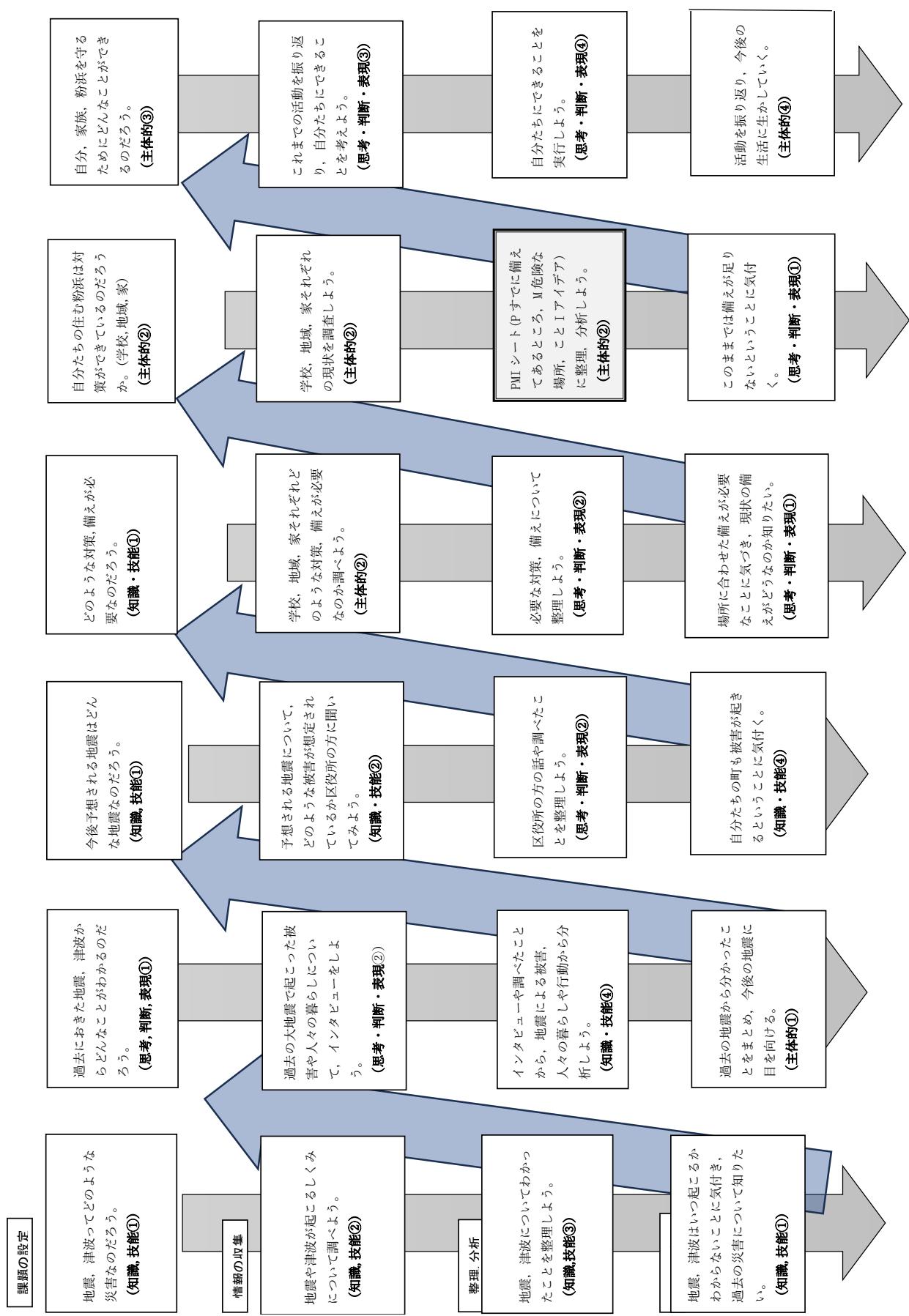
P (プラス)	M (マイナス)	I (アイデア)
海拔○メートルの表示がある。 高い建物がある。 小学校までの距離がわかる。	ブロック塀が多い。 古い建物が多い。 道が狭い。 避難経路がわからない。 お年寄りには小学校は遠い。	安全な道を探してマップにする。それをみんなに知らせる。 ブロック塀などの補強を役所の人にお願いする。 避難しやすいように車いすなどを用意しておく。

☆家

P (プラス)	M (マイナス)	I (アイデア)
水を5本用意していた。 10階建て。	4人家族ではその水の量は足りない。 非常食の消費期限がもうすぐだった。 家族がバラバラの時の対処法を決めていなかった。 防災グッズがそろっていなかった。	水を20本くらい用意しておく。 こまめに非常食のチェックをする。 家族会議を開いて、集合場所などを確認しておく。 防災グッズをそろえる。必要なものを家族に伝える。

こうして整理することで、学校、地域、家の安全性や備えはまだ足りていないことに気付き、自分たちに何ができるのか明確に考えられるようにしたい。そして、自分たちにできることを考え、家族、地域、学校への発信に向けて取り組みを進め、今後いつ震災が起きても対応できる「粉浜を守り隊」を目指していきたい。

7. 活動の流れ（全30時間 本時 18/30）



8. 本時の活動

(1) 本時について

本単元では、学校、地域、家の備えについて調べ、現状その備えができているのかを自分の目で確かめ、改善できることはないか、自分たちにできることは何かを考える。

本時では、その中でも「学校」を中心に考えていく。あらかじめ学校のどんな場所、どんなことを調べたいのか問い合わせ、調べたいところを調べられるように設定する。整理するときは、PMI シートを用いる。音楽室や図書室などの教室の環境を【P（すでに備えてあること）M（危険な場所、対策されていないところ）I（危険な場所をどうすれば安全になるか、地震が来たらどのように避難すればよいか）】の視点をもって考えさせる。その中から自分たちにできることを探し、実行することにつなげていきたい。

(2) 目標

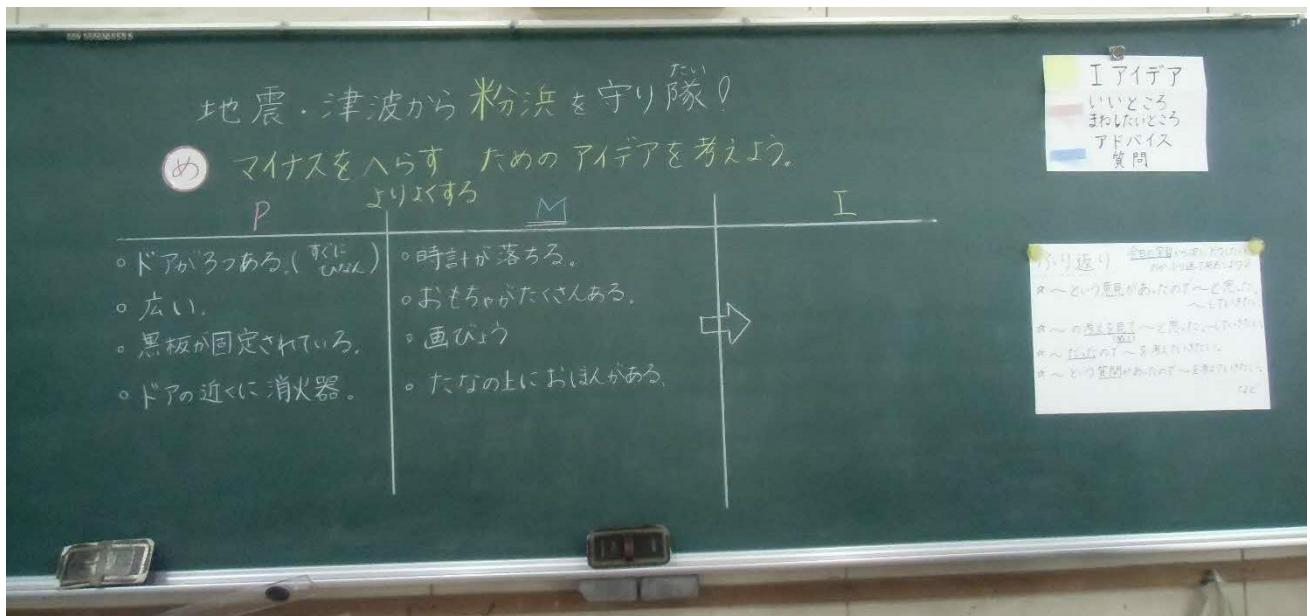
それぞれ調べてきたことから、これまで学習してきたことを生かし、どう改善していくべきかを分析し、考えを深めることができる。

(3) 展開

○学習活動	・教師のコーディネート ●本時の評価規準
○これまでの学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none">教室内の掲示物、自分のファイル、前回の PMI シートを各班に用意し前時までを振り返られるようにする。
○めあてを確認する。	<p style="text-align: center;">マイナス（M）をよりよくするためのアイデア（I）を考えよう。</p>
○PMI シートの M を分析し、I を考える。	<ul style="list-style-type: none">各教室の地震対策、避難所としての取り組みの M マイナス点から、どんな風に改善していくべきか付箋やペンを用いて考えられるようにする。パソコンや本で調べられるように環境を整える。
○ギャラリーウォークをして考えを深める。	<ul style="list-style-type: none">他の班の考えに対して感想や質問を記入し、互いの考えを交流することで多様な視点に気付くようにする。誰が見てもわかるように、危険な場所などの写真も用意しておく。 <p>●地域の人々の命やくらしを守るためにどんな行動ができるか考えようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度②)</p>
○本時の振り返りと、次時はどのようなことを考えるかを発表する。	<ul style="list-style-type: none">ギャラリーウォークでもらった意見や感想から、次時につなげていけるようにする。

※ギャラリーウォーク・・・各班考えたチャート（意見、考え）を見回り、情報を共有し、他の班の意見を取り入れたり、気付いたことや改善点、質問などを出し合ったりする活動。

9. 本時の板書



10. 指導を終えて

子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

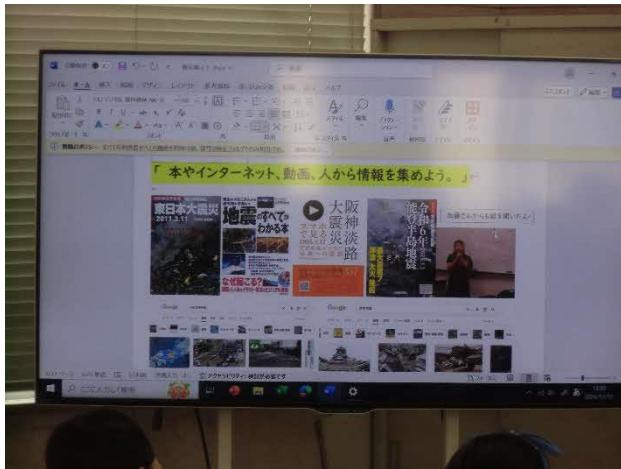
成果

- ・社会科「自然災害から命とくらしを守る」の学習と結びつけ、「もし今起きたらどうするか」という問い合わせで子どもたちの気持ちを揺さぶり、もっと調べて自分たちの身を自分たちで守れるようになりたいという意識を高めることができた。
- ・探究ペタを教室掲示することで、子ども一人ひとりの問いや気付き、考えが可視化され、学級全体で学びを共有することができた。また、子どもたちから「次は、これを整理、分析しよう！」と見通しをもって学びを進めている様子も見られた。
- ・被災者の生の声を聞く活動を通して、インターネットや本からは伝わってこなかった思いや感情に触れることができ、より自分ごととして捉えることができた。
- ・区役所の方には、“南海トラフ巨大地震”が起きた時の粉浜の様子や津波の想定などを詳しく話していただき、家でどんなものをどのくらい備えておくべきかのチェックリストの配布していただいた。また、津波が来た時にどんなビルに逃げたらいいのかをハザードマップを用いて区役所の方と一緒に確認することで、より具体的に考えることができた。
- ・子どもたちの生活の中心である「家」「学校」「地域」の危険な場所を調査し、自分たちにできることを考える中で、地震が起きる前にできることや、どのように避難すればよいかを日頃から考えようとする意識をもつようになった。

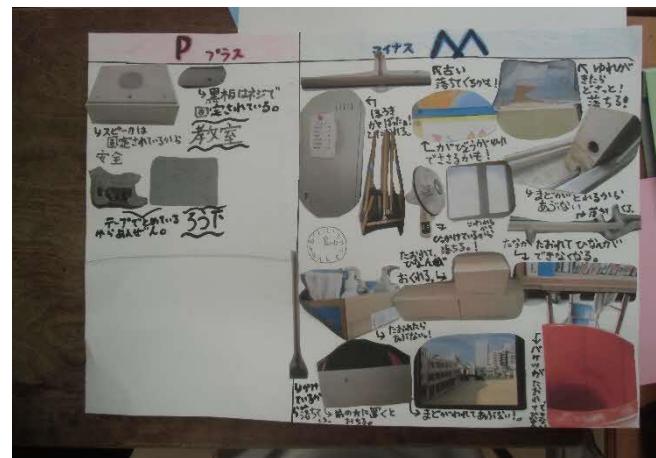
課題

- ・あらかじめワークシートなどを用意して学習を進めることで、子どもたちは「先生から用意されたものを考えればいい」という意識になっていたのではないかと考える。もっと柔軟に、やりたいことを形にするために、ICTを活用する指導方法を検討してもよかったです。
- ・危険なところを撮影した写真を印刷することで、手元で確認しながら自分のグループで改善点を話し合う点では有効だったが、グループ間交流では写真と改善案の結びつきが分かりにくく十分に活用できなかった。

探究ペタで学習の振り返りをする様子



思考ツール（PMI シート）と写真を使って整理する様子



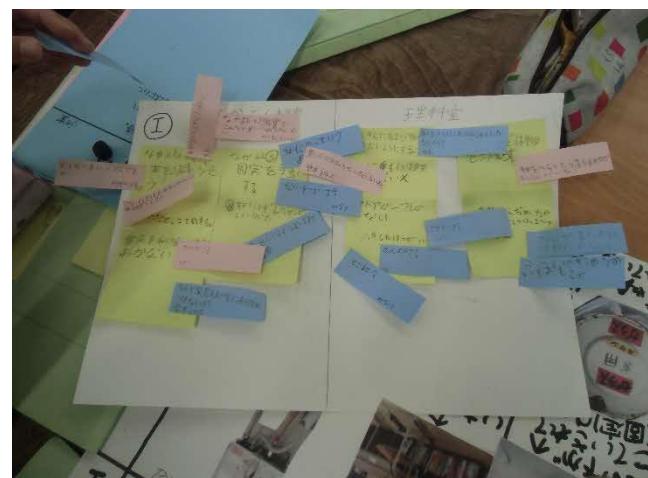
危険な場所（青いカード）の改善点を黄色の付箋で考えている様子



ギャラリーウォークをして、意見を交流する様子



真似したいこと（赤）アドバイス（青）



第5学年 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 大阪市立粉浜小学校 宮川 昭人

1. 日 時 令和7年7月9日（水） 第5校時(13:50～14:35)
2. 学年・組 第5学年1組 在籍31名 於：5年1組 教室
3. 単元名 「お米博士になろう！」
4. 単元目標

米作り体験（田植えや稻の観察など）や調べ学習を通して、自分たちの生活の一部である「米」のよさや大切さに気付くとともに、米作りに関わる人々の苦労や願いを知り、自分たちに出来ることについて考えて発信することで、米のある生活に感謝の気持ちをもつことができるようとする。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 米作り体験を通して、それらに関わる人々には、工夫や努力、苦労や願いがあることを理解し、自分たちにもできることがあると気付いていく。 2 インターネットやインタビュー等で調べた情報を集め、必要な情報を取捨選択してまとめている。 3 米作りには様々な工夫や努力、苦労があると理解できたことは、日々、米について調べることと向き合い、探究的に学習してきたことの成果であると気付いている。	1 米について自分が知っていることを考えてまとめることで、自分が調べたいことを明確にし、課題意識を見出している。 2 インターネットで調べたり、インタビューで聞いたりする中で、必要な情報を集めて整理している。 3 調べ学習を通して、見付けた米のよさや米作りの課題を友だちに分かりやすい方法で考えている。 4 課題を解決するために自分たちにできることを考え、発信している。	1 自分たちの生活で身近な米について関心をもち、調べたり、米作りを体験したりすることで、課題を見付けようとしている。 2 インターネットで調べたり、インタビューで聞いたりしたことをもとに、課題を見付け、自分たちにできることは何かを考えようとしている。 3 米について学習する活動を通して、米のある生活に感謝の気持ちをもち、今後の自分の生活に生かそうとしている。

6. 指導にあたって

(1) 子どもの実態

本学年の子どもたちは、昨年度の総合的な学習の時間で「粉浜防災リーダーになろう！」を目標に、「地震」「台風」「暑さ」「交通」のグループに分かれて活動を進めた。粉浜の過去の災害や対策・備えについて調べたり、粉浜の安全を支える人々と交流したりする活動を通して、自分たちが気付いたことを模造紙にまとめて発表した。その後、それまでの学びを他学年の友だちや家族、地域の人に発信する方法を考え、ポスターやチラシを作ることで、積極的に防災について呼びかけることができた。しかし、令和6年度経年調査の児童質問紙「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることはできていますか」に対して肯定的な回答は65%と高いと言える結果ではなかった。このような学習を通して、事前アンケート「総合的な学習の時間が好きですか。」の問い合わせに対して、97%の子どもたちが好きと答えている。「色々なことが知れて楽しいから。」「グループで考えたり、発表したりすることが好きだから。」「みんなとの仲が深まるから。」「みんなで調べてまとめるとすっきりするから。」といった理由があることから、グループで活動を進めることに楽しさを感じていたり、新しいことを自分たちで調べてまとめることに達成感を感じていたりする子どもたちが多いことが分かる。

本单元で学習する「米」は、わたしたち日本人の主食であり、子どもたちにとっても身近な食べ物である。しかし、粉浜小学校区は住宅地が多く、田んぼがほとんどない。そのため、米がどのように育つか、どのようにして育てられているのか、米作りに関わる人たちにはどんな努力や苦労があるのかを知っている子どもたちは少ない。また、給食に出てくるご飯を積極的に食べようとなかったり、返却するお皿に米粒がたくさんついていたりするなど、米を大切に食べようとしない子どもたちもいる。

(2) 題材設定について

本单元は「お米博士になろう！」と題し、米作りに関わる人々の抱える課題を見付け、日本の米を守るためにできることを考え、実行していくものである。その中で、米のある生活が当たり前だと思うのではなく、感謝の気持ちをもって生活していく心を育むことを目指している。

本学年の子どもたちは、子どもの実態でも述べた通り、グループで活動を進めることに意欲的である。そのため、米について知っていることを基にいくつかのグループに分かれ、それぞれで調べ学習を行っていき、まとめたものを他のグループに発表するという活動を取り入れることにした。そのようにすることで、それぞれのグループから見えてくる米作りの課題について考えさせたい。そして、そこで見えてきた課題に対して、自分たちにできることは何かを考えられるようにする。

また、米は身近な食べ物ではあるものの、それを育てる田んぼは身近に感じていない子どもが多いという実態から、調べ学習と同時進行で米作り体験も行っていく。種糲から発芽して苗となり、稲となるまで育てて収穫することで、米作りに関わる人々の努力や苦労を肌で感じてほしい。田植えの際

にはゲストティーチャーを迎える、米作りの苦労や課題、みんなに協力してほしいことなどをインタビューすることで、よりたくさんの情報を集め、自分たちの発表に生かすことができるようとする。収穫後には、自分たちが育てた米を使い調理実習をしたり、刈り取った藁の使い道について考えたりする。そのような取り組みを通して、米作りの大変さや米を大切に食べる意味を実感させたいと思い本題材を設定した。

(3) 主体的な学びを実現するために

本単元では、探究的な学習の計画を考え、付箋やホワイトボードなどで共有する「探究ペタ」(7.活動の流れを参照)を作成しながら学習を進める。単元の導入として、日本の硬貨や紙幣に載っているものについて考える。百円玉には桜の花、五千円札には藤の花、千円札には富士山、そして五円玉には稻が載っていることを確認し、どれも日本と関わりの深いものであることに気付かせる。その中でも特に、自分たちの身近なものとして稻(米)があることを振り返り、米について学習していくという課題を見付けることができるようとする。

米のことを知るために、今自分が米について知っていることをまとめる必要がある。まとめる際にウェビングマップを活用することで、視覚的に情報を整理できるようとする。子どもたちから出てきた情報を「品種」や「食べ方」などの項目に分けて黒板に整理し、自分が詳しく調べたいと思ったことを考えられるようにする。子どもたちが自分で調べたいと思った項目でグループを作り、調べ学習を進めていく。インターネットや本、インタビューを通して集めた情報は、ワークシートに書き込んで整理できるようすることで、情報を精選する際に役立てたい。また、各グループで調べているときに見えてきた、日本の米作りの課題についても発表できるようすることで、「日本の米を守るために自分たちにできること」という次の課題に出会えるようとする。

日本の米作りの課題として、「海外からの米の輸入」「米余り問題」「働く人の高齢化・担い手不足」などが予測される。これらの課題を見付け、その原因と自分たちの願いを順に考えた上で、自分たちにできることについて考えられるようとする。課題・原因・自分たちの願いを考える際には、ピラミッドチャートを活用することで、課題に対してどのような思いで取り組んでいくのかを明確にする。「もっと米を食べようになってほしい。」「日本の米のよいところを伝えたい。」などの願いを明確にもつことで、自分たちにできることを考える際の軸となることが期待できる。

自分たちにできることを考えて発信する取り組みを終えて、これまで「米」に注目して取り組んできたが、「収穫した後の藁や田んぼはどうなるのか」という新たな課題に出会えるようとする。情報収集を行い、整理した中で取り組みたいものを考えて実践したり、自分たちが作った米を調理して食べたりすることで、これまでの自分たちの活動を振り返ることができるようとする。

7. 活動の流れ（全30時間 本時15/30）

課題の設定

日本の硬貨や紙幣にはどんなものが載っているのだろう？
(主体的①)

情報の収集

米と日本にはどんな繋がりがあるのだろう？
(主体的①)

硬貨や紙幣に載っているものを調べる。
(主体的①)

整理・分析

どんな「歴史」「育て方」「品種」「世界の米」「食べ方」があるのだろう？
《芽出し》(主体的①)

- ・グループに分かれて必要な情報を集める。
- ・米作り体験をする。
- ・米作りに関わる人にインタビューをする。

《田植え》
(思考・判断・表現②)

硬貨や紙幣に載っているものの共通点について整理する。
(主体的①)

まとめ・表現

米を守るために自分たちにできることは？
(知識・技能①)
(思考・判断・表現①)

これまで調べてきたことをもとに、自分が発信できる内容や方法について考える。(主体的②)

発信するためによりよい内容や方法を考えて整理する。
(主体的②)

米以外にも様々な使い道があることを整理する。
(主体的③)

自分たちが育てた稲は何に利用できるだろ？
《収穫》(主体的①)

米だけでなく、糞や田んぼの使い道についても調べる。
(知識・技能②)
(思考・判断・表現④)

8. 本時の活動

(1) 本時について

子どもたちは、これまでに米を育てながら、グループごとに米について詳しく調べたことをまとめてきた。そして、調べる中で気付いた米作りの課題を全体で共有し、その課題の原因と自分たちの願いについてピラミッドチャートで表した。本時は、自分たちの願いを基にできることを考え、今後どのようなことに取り組んでいくのかを考えていく活動である。自分たちにできることを考える際にはウェビングマップを活用することで、様々な意見を視覚的に整理できるようにする。また、それぞれのグループの意見を黒板に整理することで、全体で共有できるようにする。その上で、現実的に取り組める内容なのかを精選していく、今後の活動に見通しをもつことができるようとする。

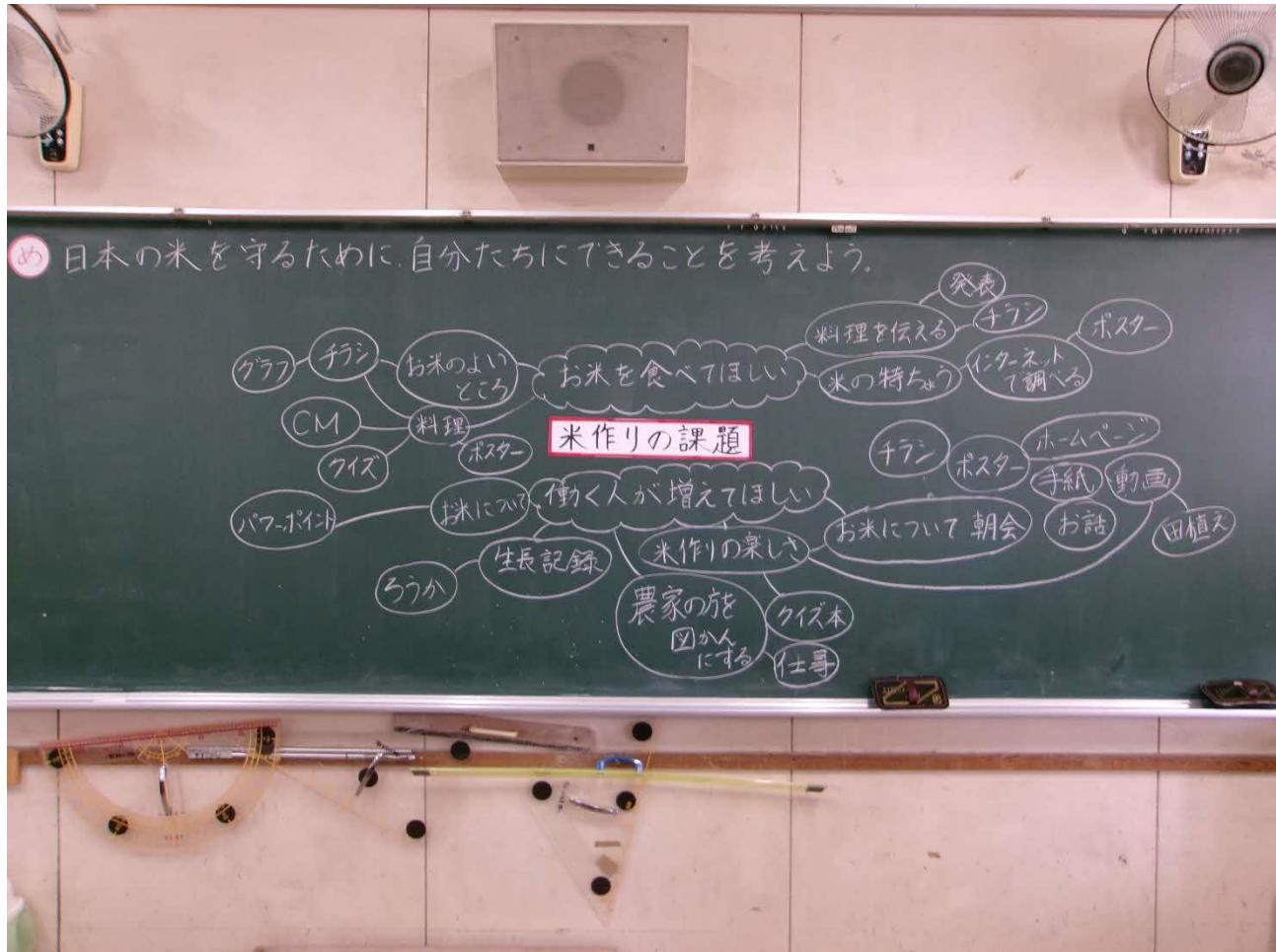
(2) 目標

米作りの課題を解決するために、自分たちにできることは何かを考え、伝え合うことができる。

(3) 展開

○学習活動	・教師のコーディネート ●本時の評価規準
○これまでの学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none">・米について詳しく調べてきたことで見えてきた課題・原因・自分たちの願いについて振り返る。・前時に書き込んだピラミッドチャートを確認できるようにする。・自分たちの願いを黒板に提示することで、これまでの学習を全体で振り返ることができるようする。
○本時のめあてを考える。	<p style="text-align: center;">日本の米を守るために自分たちにできることを考えよう。</p>
○ウェビングマップを使い、自分たちにできることについて考える。(グループ活動)	<ul style="list-style-type: none">・役割分担をして、話し合いをスムーズに行えるようにする。・一人一人が主体的に活動できるように、付箋に書き込んで貼り付けられるようにする。・同じ意見はまとめて整理するように伝える。 <p>●インターネットで調べたり、インタビューで聞いたりしたことのもとに、課題を見付け、自分たちにできることは何かを考えようとしている。(主体的に学習に取り組む態度②)</p>
○グループで考えたことを全体で交流する。	<ul style="list-style-type: none">・それぞれの考えを板書して、整理しながら全体で交流できるようする。・実現可能なものになっているかを確認しながら交流できるようする。
○本時の振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none">・次時に向けての課題を確認することで、今後の活動への見通しをもつができるようする。

9. 本時の板書



10. 指導を終えて

子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

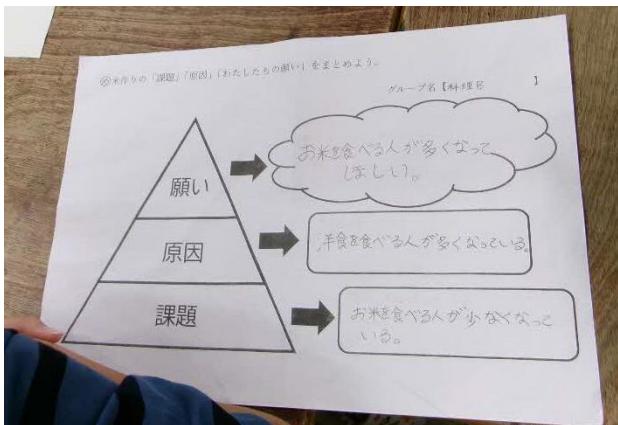
成果

- ・社会科の学習や、身近な物から「米」に関心をもち、育て方や品種、歴史や食べ方などについて自ら興味のあるテーマについて学習を進めたことで、前向きに取り組むことができていた。
- ・米作りに関わる人から田植えの仕方を教えてもらったり、現在の米作りにはどのような苦労や願いがあるのかを聞いたりしたことで、自分たちにできることは何なのかを積極的に考えることができていた。
- ・昨年度の「総合的な学習の時間」でグループ学習を継続的に取り組んできたことにより、話し合い活動や考えを整理する活動をスムーズに進めることができていた。
- ・前時で、米作りの「課題」「原因」「自分たちの願い」についてまとめたことで、スムーズに本時の活動に取り組むことができていた。
- ・本時が始まる前に、考えた意見をメモにして用意しておく児童の姿が見られ、学習に対して積極的な姿勢で活動することができていた。
- ・司会の話型があったことで、一つ一つの意見に耳を傾けながら、グループでの意見交流ができていた。
- ・教室に探究ペタを掲示していたため、これまでの学習を振り返りつつ、次の課題を設定することができていた。

課題

- ・「日本の米を守る」というめあてでは、スケールが大きすぎて子どもたちが自分事として捉えにくかった。
- ・「米の課題」と向き合う題材を扱うには、地域との連携や田んぼ見学など、より自分事として捉えることができるような工夫が必要であった。
- ・現代の課題となっている「米不足」や「備蓄米」などの課題に触れて探究していってもよかったです。
- ・「働く人を増やしたい」という願いを実現するのは、子どもだけの取り組みでは難しい内容であった。
- ・子どもたちが米作りをより身近に感じるために、稻を育てて収穫する時期に合わせて本時の取り組みをすることができればよかったです。
- ・「ポスター」や「チラシ」など、伝える方法についてはたくさん意見が出たが、そのような方法を使って何を伝えたいのかをメインに考える時間があってもよかったです。

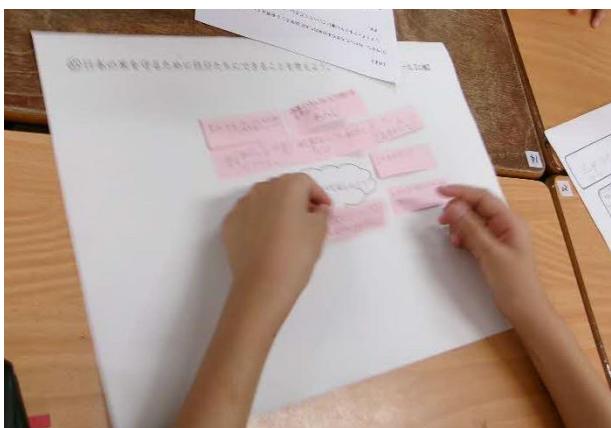
前時にまとめた「課題」「原因」「願い」



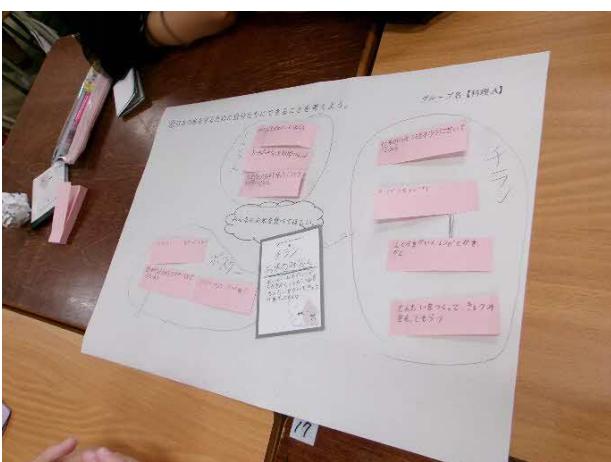
個人で出した意見を整理する様子



それぞれの意見を整理してまとめる様子



意見を整理して発信方法を考えている様子



発表して全体で意見を交流する様子



第6学年 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 大阪市立粉浜小学校 水口 美穂

根木 涼聖

1. 日 時 令和7年9月25日（木） 第6校時（14:45～15:30）

2. 学年・組 第6学年1組 在籍28名 於：6年1組 教室

3. 単元名 「『なりたい自分』を見つけよう」

4. 単元目標

「大人になつたらしてみたいこと」について、一人ひとりが考え、実際に経験したことのある人やその仕事をしている人にインタビューをしたり、インターネットで調べたりする活動を通して、今の自分を見つめ直すとともに、これから自分はどうなっていきたいのか想像し、夢や希望をもって意欲的に行動しようとすることができるようとする。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 働くことには、お金を稼ぐことや社会に貢献すること、能力や個性を發揮すること等、様々な動機があり、やりがいや働く理由は多様であることを理解している。 2 仕事について調べたり、働く人にインタビューしたりすることで、働く人々の思いに気付いている。 3 インターネット上やインターネットによる情報収集から、知りたいことや必要なことを取捨選択している。	1 将来の自分について考え、課題を設定し、予想をもって解決方法を考えている。 2 自分で調べる課題について、インターネットで調べたり、インタビューで聞いたりする内容を考えている。 3 働く人の思いの共通点や、その職種ならではのよさや苦労といったことを比較したり、関係付けたりすることで、将来に対する自分の考えをもっている。 4 学習を通して考えた「なりたい自分」について、どのように表現するかを考え、伝えたいことが相手に伝わるように発信している。	1 これまでの自分を振り返り、これからどう成長していきたいのか自分の課題を見付け出そうとしている。 2 様々な人との出会いから、働くことに対する思いに触れ、自分の生き方や生活を見つめ直している。 3 学習を振り返り、今後の自分について考え、夢や希望をもって行動しようとしている。

6. 指導にあたって

(1) 子どもの実態

本学年の子どもたちは、4月から新1年生のお手伝いを積極的に行ったり、縦割り班・クラブ活動・委員会活動などで他の学年の子どもたちを引っ張ったりするなど、最高学年としての自覚が芽生えてきている。これまで人前に立つのが苦手だった子どもも、「学校のために」「みんなのために」と自分から進んでリーダーに立候補したり、委員会の仕事で前に立って発表したりする機会が増えてきている。また、6年生は、自分の進路について向き合う中学生になるための準備段階とも言える。全国学力学習状況調査の児童質問紙では、「自分には、よいところがあると思いますか」という質問に対し62%、「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対し66%、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問に対し84%の子どもが最も肯定的な回答をしており、いずれも全国・大阪市平均を大きく上回っている。また、事前にとった将来に関するアンケートでは、将来なりたい職業に自分の身近な職業を書く子どもが多かった。自分で自分のよさや長所に気付き、人のために何かしたいという思いが強い子どもが多い。「いろいろな人に笑顔になってもらえる」「自分のやりたいことができる」と将来に対して前向きにとらえている子どもも多かった。

一方で、将来についてどう思っているかたずねたところ、「なりたい仕事に就けるかわからない」や「人とうまく関わるか心配」など、具体的な将来を想像することで不安な思いをもつ子どもがいた。小学校生活最後の一年で、自分たちを支えてくれる身近な人に話を聞いたり、大人になってしてみたいことについて調べたりすることで、自分を見つめ直し、夢や目標に対してどのように向き合っていけばいいのかを具体的に考えられるきっかけになるように学習を進めていきたい。

(2) 題材設定について

本单元では「自分(人)」がキーワードである。学習を進めていく中で様々な人と出会う場を設定し、たくさんの人との関わりからこれからの自分について考えさせたい。

初めて出会う人では、地域で働く人や、興味のある職業で働く人などをゲストティーチャーとして招き、なぜその職業に就き働いているのか、働くことのよさ、やりがいなどをインタビューする。実際に働いている人の声を聞くことで、より自分ごととして考えられるようにする。その際に、様々な生き方や職業を経験してきた人と出会う場を設けるようにし、多様な考え方方に触れさせる。将来に対する考え方や生き方は一つではないことや、職業が違っても共通する考え方があることに気付かせたい。

身近な人では、一番身近で過ごしてきた家族と話すきっかけの場を設ける。働くこと・生きること・夢など、普段話せないことを今一度向き合って話を聞くことで、どんな思いで働き、生活しているのに気付いたり、知らなかつた一面を知ったりすることで、より子どもたちにとって心に残るよい機会になると考える。ただし家庭の事情で難しい場合は、身近に関わっている大人にインタビューするように促す。

本学年の子どもたちは、コロナ禍の中入学し、外部の人と話す機会が少なく、低学年では体験活動も十分にできていない面がある。小学生の間に様々な人と関わり、交流することで、働くことを自分ごととして考え、将来に明るい希望をもって卒業してほしいと考え、この題材を設定した。

(3) 主体的な学びを実現するために

本単元では、子どもたちが探究的に学習を進めていくことができるよう、「探究ペタ」(7. 活動の流れを参照)を作成しながら学習を進める。単元の導入として、今の子どもたちの中で「働く」とはどのようなことだと思うかをたずねた。「義務」「家族のため」「お金のため」「生きていくため」などの意見が出た。また、この先の進路をどのように決めたいか聞くと、「学力」「夢」「とりあえず進学」という意見が出た。常に子どもたちに問いかけ、自分自身のことを人に聞くのではなく、自分ごととして考えられる取り組みを重ねていきたい。

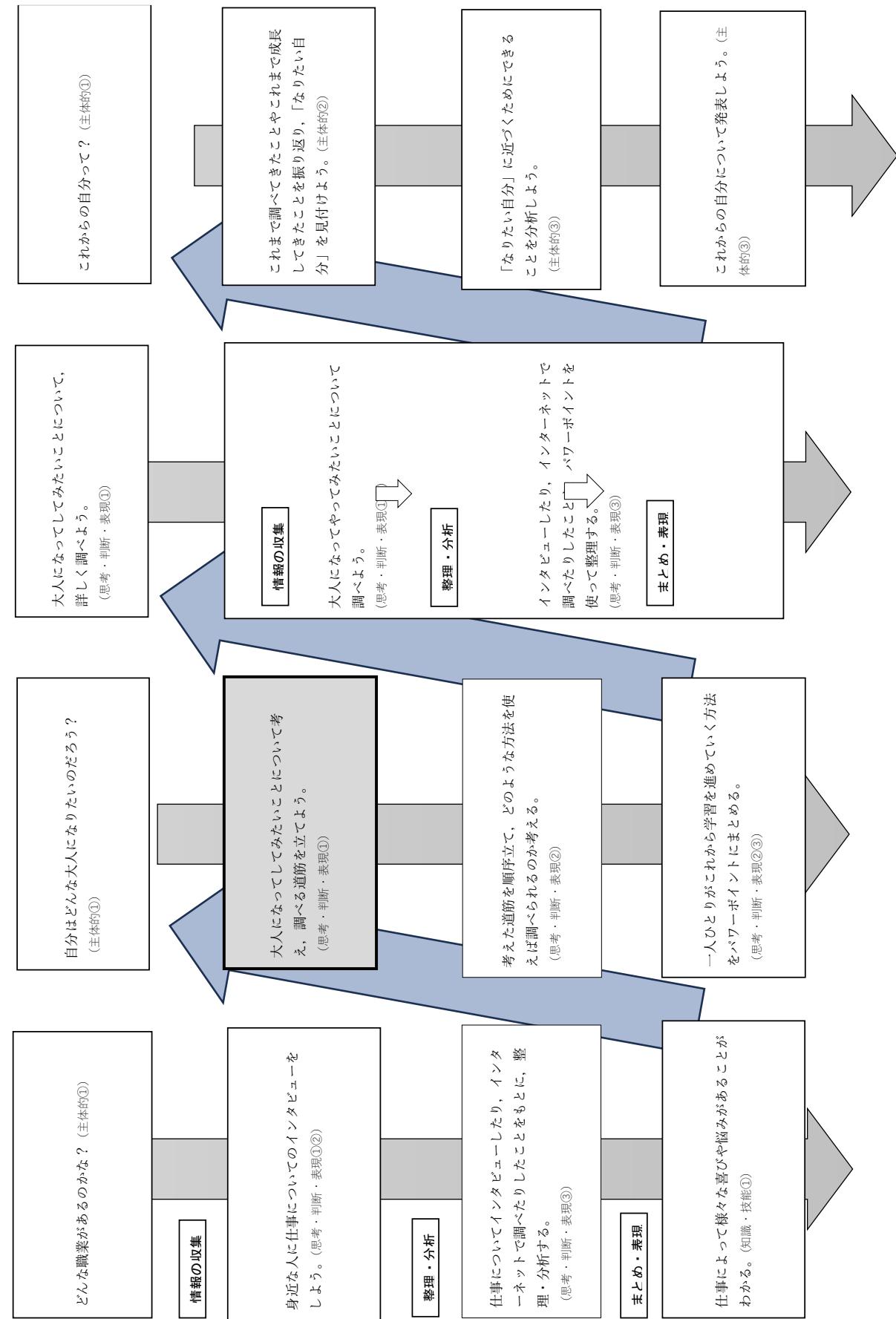
実際に働いている人から話を聞く活動では、まず家族や親戚などとゆっくり時間を取りやすい夏休みに「仕事」についてのインタビューをしてくるようにした。普段はなかなか落ち着いて話をする機会がない身近な人とも、じっくりと話すことができるよう設定した。またそれと同時に、粉浜小学校で働く職員の方に話を聞く機会を設ける。いつもお世話になっているが、なかなかゆっくりとお話を聞く機会がなかった方の話を聞けるようにする。集まったインタビューをもとに、それぞれの職業のやりがいや悩みを見付け出せるようにしたい。

「大人になったらしてみたいこと」について考える活動では、一人ひとりが自分で探究を進めていくことができるよう、自由進度学習の形で学習を進めていく。学研のサイト『シゴトのトビラ』の映像や、図書室の本、インターネットを活用していく。『シゴトのトビラ』では自分の気になる仕事のカテゴリを開くことで、具体的にどのような職業があるのか、どんな人に向いているのかなどが書かれているため、子どもたちも進んで調べることができると考えられる。また、図書室にはお仕事図鑑や今後増えていくとされている新しい職業図鑑などがそろっている。学年の本棚に準備をしておき、すぐに手に取れるようにしておく。また、学習を進めていく中でインタビューしたいことが出てきた時には、OENを活用したり、実際に経験したことのある人を子どもと一緒に考えたりして、ゲストティーチャーにお話を聞ける機会を設けていく。一人ひとりが調べている内容について進度を把握し、困っている際には個人の探究を支援できるようにしたい。

3学期にある学習発表会で今の「なりたい自分」を発表する機会を設け、自分がこの一年で考えてきたことを発信できるようにする。自分の夢に向け「今何ができるのか」と考える姿勢をもち続け、主体的に行動できる子どもたちの姿を期待している。また、保護者に協力してもらうことで、子どもたちが自信をもって夢や目標を追いかけることのできる環境をつくっていくと考える。

7. 活動の流れ (全35時間 本時7 / 35)

課題の設定



8. 本時の活動

(1) 本時について

子どもたちは、これまでに自分の身近な人に「仕事」についてのインタビューを行ったり、学校で働く職員に話を聞いたりする活動を通して、様々な仕事のやりがいや悩みについて考える学習を進めてきた。その活動を踏まえ、前時に「自分が大人になってしたいこと」について考えた。本時では、そのしたいことについて自分で探究していく内容や方法を考えていく。

この後の学習では、自分がしたいことに合わせた個別の自由進度学習を行っていく。一人ひとりがどのようなことを調べていくか計画を立てられる時間にできるようにする。

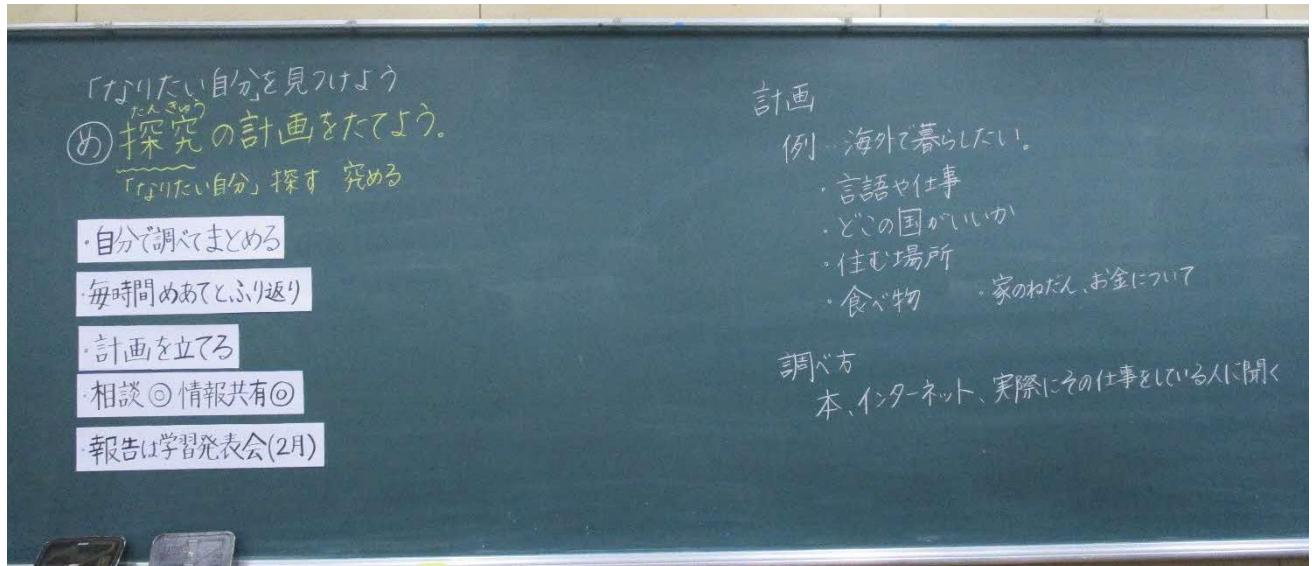
(2) 目標

自分が大人になってしてみたいことについて、今後自分で調べることができるよう計画を立てることができる。

(3) 展開

○学習活動	・教師のコーディネート ●本時の評価規準
○これまでの学習を振り返り、本時の課題と活動の内容を考える。 ○本時のめあてを考える。	<ul style="list-style-type: none">これまでの学びを振り返られるように学習の流れをまとめたものを教室内に提示しておく。ワークシートや掲示物、発表ノートなどから、前時までの学習を振り返ることができるよう声かけをする。
探究の計画をたてよう	
○探究の流れを確認する。	<ul style="list-style-type: none">探究学習を行う時間、2月にまとめたことを学習発表会で報告すること、毎時間の進め方などを全体で共有できるようする。次時から使用していくワークシートを見せ、子どもが探究学習への見通しをもてるようする。
○大人になったらしてみたいことについて、何を調べるのか考え、発表ノートに書き込む。	<ul style="list-style-type: none">いくつか例を挙げたり、発表ノートをお互いに見ることができるようにしておいたりすることで、悩んでいる子どもが他の子どもの考えを参考にできるようにしておく。
○どのような方法で調べていくのかを考え、発表ノートに書き込む。	<ul style="list-style-type: none">どのような方法を使えば具体的に探究することができるのかを考えられるように、一つ例を挙げ、学級全体で考える機会を設けるようにする。 <p>●将来の自分について考え、課題を設定し、予想をもって解決方法を考えている。 (思考・判断・表現①)</p>
○次の時間にどのように探究学習を進めていくのか考える。	<ul style="list-style-type: none">計画表を見て、次時に自分は何をどのように調べていくのかを把握できるようにする。

9. 本時の板書



10. 指導を終えて

子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

成果

- ・調べるテーマを自分で決めることができたので、多種多様な探究を設定することができた。
- ・職業だけでなく将来やってみたいことを事前にたくさん挙げておくことによって、子どもたちが前向きに活動に取り組むことができた。
- ・学習用端末を効果的に取り入れたことで、児童が自分で活動を進めることができた。
- ・教室に学級全体の探究ペタを貼っていたため、子どもが自分で学習を進めていく計画を立てる際に役立った。また、探究ペタを作っていく様子を見て、調べ学習をしている中で気になることが出てきた時に、同じように調べたいことを自分で追加したり変更したりする姿が見られた。
- ・学習を進めていく中で気になったことを、自分たちでどのように調べればいいか考え、総合の学習時間以外でも調べようとする姿が見られた。また、自分でインタビューしたい人を見付けて、話を聞きに行く子どももいた。
- ・友だちの発表ノートを見る能够ができるようにしていったので、お互いにどのようなことを調べようとしているのかを共有でき、参考にし合うことができた。

課題

- ・これまで「探究」という活動をあまり行ってこなかつたため慣れておらず、自分で「めあて」を考えることが難しそうな児童がいた。
- ・教室で前を向いて授業を行うと子ども同士が話しくそうにしていたので、場を変えて授業を行ってもよかったです。
- ・子どもたちが戸惑うことが予想されたため、スライドを作る前に手本を見せたが、「探究」は学習者が主体であるため、内容や時間は自分で調整できるようにした方がよかったです。
- ・指導者が「探究」という活動に慣れていないため、子どもが進め方に悩んだ際に指導者側で導いてしまうことが多くなってしまった。

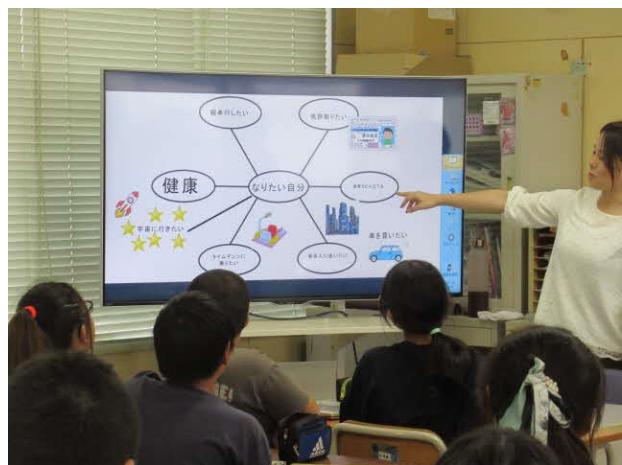
学校の職員にインタビューした掲示物



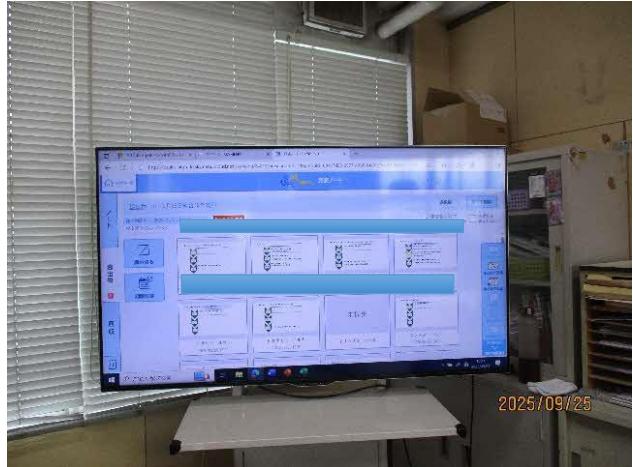
友だちに相談しながら活動を進めていく様子



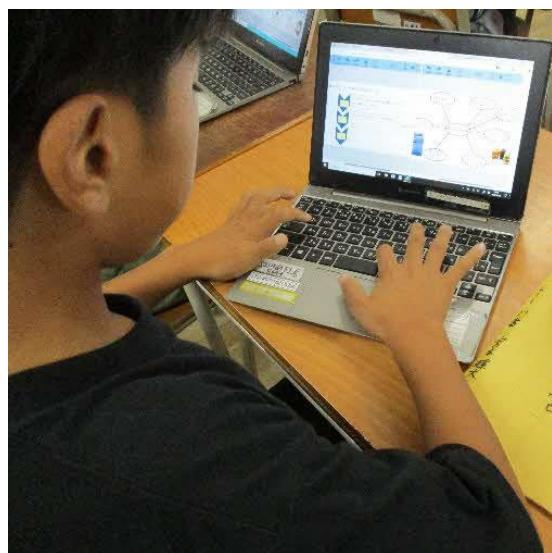
子どもが作成したウェビングマップで前時までの学習を振り返る様子



子どもが作成した探究の計画を共有する様子



子どもたちが計画を立てている様子



IV. 研究のまとめと今後の課題

1. 研究の成果

子どもが主体的に学びを深め、仲間と協働的に探究していくことができるよう、今年度は次の2点を意識して取り組みを行ってきた。

(1) 子どもにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援

子どもがより主体的に学習を進めていくために、「実際に体験する」という活動を多く取り入れた。1年生では、教室の中にあさがおの植木鉢を実際に持ってきて、観察しながら交流することで、自分のものだけでなく、友だちのものと比べながら観察することができ、新たな発見をすることができた。2年生では、野菜を育てている中で出てきた課題を、Teams をつないで野菜作りに詳しい人に話を聞くことで、自分たちで解決方法を考えることができた。3年生では、車いすユーザーの方を学校に招き、話を聞くことで、自分たちなりに当事者の方の思いを考えることができた。4年生では、被災者の方や区役所の方から話を聞くことで、防災をより身近に自分事として考えることができた。5年生では、米作りに関わる方から話を聞くことで、自分たちにできることを積極的に考えることができた。6年生では、身近な大人や学校の職員から実際に話を聞くことで、自分の考えを広げることができた。「実物を見る」や「人にお会う」という体験活動を全学年で取り組んだことにより、課題をより自分に身近なこととして捉えることができた。そして、「もっとこうしたい!」「みんなに発信したい!」と考え、意欲的に調べたり考えたりしようとする子どもが増えた。また、最後に振り返りを必ず行うことで、その時間だけで終わるのではなく、次時の学びへつなげていくことができた。

生活科・総合的な学習の時間だけでなく、他教科の学習と関連させて学びを深めることも非常に効果的であった。国語科で学んだ話し合いの仕方を活用したり、今学習している社会科の学習とつなげたりすることで、教科横断的に学習を進めることができた。

(2) 探究ペタを活用した実践

探究ペタを用いることによって、学習してきたプロセスが目で見て分かるため、子どもたちが見通しをもって活動することができた。また最終的にどのような姿になりたいかというゴールを定めておくことで、子どもたちが学習の計画を立てやすくなった。その時間のめあては、昨年度と同様、常に子どもたちと話していく中で一緒に作っていくようにした。学びを重ねていく中で、「今日はこうしたい。」というつぶやきが出てくるようになり、めあてがより子どもの思いに沿ったものになることもあった。また、探究ペタを作っていく際に行った、活動の見直し、変更や修正を自分の探究の計画に生かす学年もあった。自分で学びたいことを見付け、それを実現するためにどのように学習を進めていけばいいかということを、子どもが自分で考えられるようになってきている。

2. 今後の課題

- 子どもが主体となって学習を進めていく「探究的な学習」についての研究を進めてきたが、子どもが自分たちで学習を進めていく活動に慣れていないだけでなく、指導者側もよかれと思ってアドバイスをしそぎてしまうという場面があった。また、探究ペタを使う経験が浅く、学習にうまく対応させられない部分もあった。探究ペタの特長を生かして、より子どもたちが自分で気付いたり考えたりする喜びを感じることができるように、指導者が探究的な学習について今後も学び続けていく必要がある。指導者も子どもも、「探究的な学び」ができるよう、生活科・総合的な学習の時間だけでなく、他教科の学習でも意識して取り入れ、時間をかけて積み重ねていきたい。
- 子ども同士が交流していく際に、普段の教室の机の配置では進めにくいことがある。その際に、学校内の多目的室や体育館などを効果的に活用していくことで、より多くの人と主体的に交流することができるようにしていく。
- 「課題の設定」の段階で、自分にとって身近だと感じられるような課題を設定し、「情報の収集」でより深く調べておかないと、「整理・分析」、「まとめ・表現」の活動が難しくなると感じた。また、「まとめ・表現」から次の課題を設定するところにつなげにくくなるということも実感した。子どもたちがより「自分事」として考えていくことができるよう、テーマや課題はよく精査する必要がある。
- 探究的な学習を進めていく中で、子どもたちの思いを十分に実現させることができない部分があると感じた。昨年度の取り組みをもとに、あらかじめ指導者側が次にどのような流れになりそうか想定して準備をしているが、学習を進めていく中で「もっとこうしたい」と子どもたちのやりたいことが膨らんでいく。その中でどうしても時間や場所、予算などの関係で実現できないものもあったため、指導者が様々なプロセスの在り方を研究していく必要がある。

おわりに

本校では、昨年度から「子ども主体で創る『探究的な学び』」という研究主題で、生活・総合的な学習の時間について研究を進めてまいりました。子どもたちは、昨年度1年間で様々な「本物」に触れ、たくさんの「思い」を知り、子どもたちの生活に生きる学びを重ねることができました。

その一方で、令和6年度経年調査の児童質問紙「授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。」の問い合わせに対して、4学年中3学年が大阪市平均を下回る結果となりました。指導者も研究1年目ということもあり、最終的には、あらかじめ考えている計画に沿うように指導を進めている場面が多くなっていました。また、子どもたちも、自分の興味関心があることについて、探究する自信をもつことができていないという課題が考えられました。

そこで、今年度も引き続き同じ研究主題で、子どもたちが「自分で」調べて解決する学習活動を追求することにしました。指導者が「子どもたちにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援」をしっかりと意識することで、各学年の子どもたちは、指導者や友だちとのやり取りの中で、次の課題ややってみたいことを意見しながら、「探究ペタ」を作成する様子が見られるようになってきました。まだまだ、理想とするような支援には辿り着きませんが、これからも指導者が「子どもたちにとって自然なストーリーである学習展開を進めていくための支援」を意識し続けることで、子どもたちの「主体的・対話的な深い学び」につながっていくと考えております。これからも教職員一同、研究を積み重ねてまいります。

ここにささやかではありますが、本年度の本校の研究の概要を紀要としてまとめました。どうかご高覧いただきまして、ご指導を賜りますようお願い申しあげます。

最後になりましたが、本校の研究推進にあたりまして、ご指導、ご助言を賜りました、大阪市総合教育センターのスクールアドバイザー松井奈津子先生に、心より厚くお礼申しあげますとともに、今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますようお願い申しあげます。

令和8年1月

大阪市立粉浜小学校 教頭 井上 了太

研究同人

信貴 通子	井上 了太	森 淑	山本 織江
森田 真尋	奥野 瞳夫	中尾 陽	辻本 朋子
一見 美菜	藤岡 一恵	房 菜々希	宮川 昭人
西口 寛和	水口 美穂	井上 幹太	浦 喜美子
小笠原空渡	天満 祥子	根木 涼聖	樋野 愛恵
門内 愛季	村上 京子	大西裕美子	湯浅亜希子
三保谷佳那実	徳永 伸介	三宅 咲良	中岡 杏実